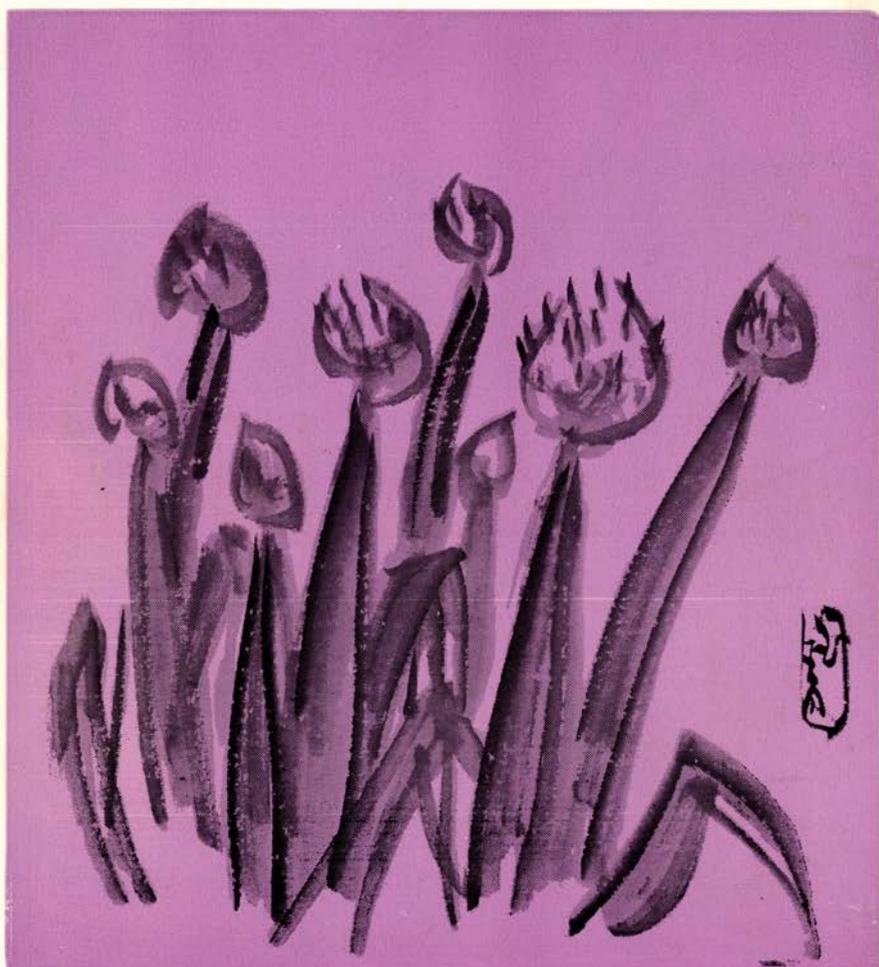


川柳塔

昭和四十六年三月二十五日 印刷
昭和四十六年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五二七号



No. 527

二賞中間発表

四月号



大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の静かな環境にある大和文華館は 日本建築の特色に近代美を生かした美の殿堂です 収蔵品も日本中国を中心に 絵画・彫刻・書蹟・陶磁など多数の国宝・重要文化財をふくむ 日本有数のコレクションです 春秋に特別展開催

観覧…10～17時<月曜休館>
入館料…100円 こども50円
あし…近鉄学園前駅すぐ

近鉄



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る
海岸美を
風光明媚な

すがる手にすがられる手がくずおれる

銀髪が目立つ人柄前屈み

生き甲斐はあけすけに言える正義感

旅なれば申訳ない群れとなる

老成ぶる自慢は能のない話

時計の振り子

私の家に古い柱時計がある。大して手入れもせぬのにネジさえ忘れずに巻いてやると淡い音を立てて振子が何十年前と同じリズムで同じ形で右に左にゆれている。

二、三年前に流行した尖った靴の先がこの頃丸くなって古い靴では気がひける。ミニだミニだと嬉しがっていたのに何時の間にかパントロンとかいうものが箒の代りに街を掃いて歩いている。

女と間違う長い髪で得意がってる若い男の頭が今に坊主頭でないと恥かしいと言う時代

が来るではないかと楽しみに待つて居る。長くしたり丸くしたりするだけなら十年一日の如き私の家の時計の振り子と同じだ。中身の進化があつてこそ、個性としての欣び、尊さが生れて来るのではないか。他人様の真似ばかりに気をとられ、右に振れ左に振れ、新しい言葉や文字を追いまわす独りよがりでは、きっとその人の前途には寂しい終点が立ち塞がっているに違いない。作句の上での心構えが時計の振り子であつてはなるまい。

中島生々庵

川柳塔四月号

川柳塔四月号目次

座右の句

ふるくとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

洋服を着ても大工の癖を出し

横山一声

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

時計の振子

川柳塔……(同人作品)

中島生々庵選

(1)

川柳をしていてよかったと思うことも

浜田久米雄

(2)

川傍柳初篇研究……(九十三)

前田喜代人・岡崎重義・清
川端柳風・故高須唾三味・丸
博美・藤井和雄
十府・岡田甫

三島由紀夫と川柳

東野大八

(22)

近作柳樽

川村好郎選

(30)

秀句鑑賞

(同人吟)

菊沢小松園

(24)

46年度二賞中間発表

西尾 栞

(25)

近詠

諸家

(51)

同次元に

高鷲亜鈍

(43)

川柳をしていてよかつたと思うことも

浜田久米雄

ことしの三月で退職をしてから満七年になる。どこへも勤めずに過ごした七年間である。農業、盆栽、町の仕事、そして川柳の四つを大切に守りつづけて来た。

勤務をしていた頃はそれほどまでに感じなかったが退職してからの生活は自分の思うように暮してゆける余裕が十分にあるがために無聊に苦しむ時間が多くなるように思われる。けれども私には川柳があるから無聊を嘆くようなことは一日もない。毎月二回の定期例会に時折の大会、雑誌への投句、句評の依頼、句報の編集、柳人への連絡、整理など朝から晩まで川柳に關してのことどもが頭から離れないのである。

書斎には退職をしてから各地の大会に出席した時のリボンの大小が、三十数枚吊り下げられている。これは一年に五回位大会に出席したことになるのでリボンの出ない大会もあるからそれ以上になっているであろう。この

川柳五十三次……(七)	富士野鞍馬……(40)
川柳「難波別院由来記」……	戸田古方……(28)
春は大萬川柳大会から……	橘高薫風……(39)
句集「瘦せた虹」評……	本多柳志……(47)
きのうきよう……	本多柳志……(47)
初步教室……	本田恵二郎……(50)
大萬川柳「引き継ぎ」……	川村好郎選……(52)
川柳家の暦……(四月生まれの人)……遺稿……	清水白柳……(48)
柳界展望……	(薫風)……(56)
本社三月句会……	(庸佑)……(58)
各地柳壇……	(文秋)……(61)
一路集「入」……	垂井葵水選……(48)
「本」……	川口弘生選……(48)
「社」……	福田丁路選……(49)
「客」……	(一三夫・葉子)……(65)
編集後記……	

座右の句

夫婦別あり 影と影

私の句

片手あずけて甘き囁き

(路郎)

直原 七面山

たのしさ生甲斐は退職後川柳をやっているからであるのはもち論のことであり、退職をして何もせずに家でぼやっとしていた人の気持がわからぬような気がする。なにをたのしみになにを目標に余生を過ごしているのであらうか、むしろあわれみの気もしてくるのである。

この間町の老人クラブの世話をしている人から老人クラブ員のなかで川柳をやりたいという希望を持っている人が数人おるのでその手ほどきや指導をしてもらいたいというまこととうれしい話が届けられた。私はよろこんでお引受けする旨を答えた。たとえ二人でも三人でもよい、集ってもらえばいつでも出かけることにした。この人達は新聞や雑誌を読んで川柳の欄に興味を持ち手持無沙汰な人生に川柳によってうるおいを持ちたいという念願から決心されていることであろうと思う。

昨年は句碑が建ちこの四月には除幕式が行なわれる運びになっている。川柳生活を振り返って見てこんなありがたいことはないのだとつくづく考えている。これから先何年つづくかわからぬ私の余生は川柳によって明け暮れる頁に塗りつぶされて行くことであらう。

噛みしめるほど川柳の味があり 久米雄



中島生々庵選

大阪市 大坂 形水

倉敷市 野田素身郎

娘 死去

天国へお嫁に行ったのだよ きっと
手を握り返してきそう握っててやる
好きだった着物を皆で着せてやる
ご先祖へ一人で往く娘のこと頼む
思い出はみな笑ってる顔ばかり

春になれば春になればと弱って
飲まずにはおれぬ気持を妻知るや
こうも差がついてしもうた勤続賞
振り向いたばかりにいやなものを見る
指定席でかい男と乗り合わせ

岡山県 直原七面山

生駒へ霞乃先生を訪う

大阪市 山川 阿茶

故清水白柳氏に捧ぐ(二句)
定めとは言え逝くは悲しき
歩く外なし金持たぬ恋

幻想の中の彼女は真っ裸

雨ポツリポツリアベックまだ立たず

そそのかされて愛の勝負に出る女

先生のお点前炬燵でかしこまり
死にたけりゃ死なせてあげたい気にもなり
貰うた子も死んで年寄二人いる
生き死にのめやすになってる年賀状

劇 樋口一葉の一生

精魂の最後の一滴筆にこめ

市場籠千円の嵩妻が見せ
金儲け下手とは妻ももう云わず
地を蹴って孫嬉しさのありつたけ
バイバイに泣き出す孫が愛しゅうて
老後のこと考えときと子に云われ

大阪府 金井文秋

主治医と家族で箱入り婆々にされ
エリートへ女・女の視線追う
口止めをしてまで言うた愚痴を悔い
ギリギリで車が止まるいやな音
白柳師を亡くして

大阪府 西出一栄

大和国原冬あたたかき柿のころ
霜ばしら近かづくほどに塔高し
黙っていたいときに自分の部屋の窓
古寺めぐる夫婦の顔にある陽射
冬がかたまつたように紫陽花立ち枯れる

大阪府 正本水客

大器晩成ようやく腹が立ちはじめ
まだ未練あったと気づく日の妬心
ぜい沢な悩みは馬鹿になり切れず

倉敷市 松下梁水

義母として叱る言葉にふと迷い
運命がこんなに通う手を握り
東大阪府 竹中綾女
水茎のよさ褒め兼ねる前衛派
嵐過ぎ隣りへ散った落葉掃く
百万の雛も買えるに子無き家
孫に似た内裏に決めた初節句
雛買えず雛見せ歩く親の智恵

岸和田市 内藤きさ子

拍手する片手は義理の音がする
手袋に切符の薄さにぎりしめ
耐えている心土びんの湯気に似て
五万円の仔犬リボンの似合う顔
快晴へ来たこともない道を選び
岡山県 浜田久米雄
ご不満はありましようがと酒を酌ぎ
歯を抜きに行く日を他人が決めてくれ
お愛想の悪い男に迎えられ
一人だけ飲んでしゃべってぶいと去に
肺がんのことは存じている紫煙

出雲市 尼 緑之助

四十六年ぶりの豪雪(三句)
立春の異変あきれた雪になり

休校休業あきらめて仰ぐ空
豪雪も峠のこのこ月が去る

パンタロン言いたいことを言つてのけ
脚も見て下さいブーツに冬がはれ

青森市 工藤 甲吉

世の中はどう変わろうと竹の節
糸の切れた凧を浪人見ていたり
D51ですヨと定年言つて去に
口笛が吹けて少年らしくなる
仰山な声おっぱいをつつかれる

倉敷市 本田 恵二朗

慣れ過ぎてはならぬと我れに言い聞かせ
登りきつて見おろす三十年の道
あの時の一と押しがなあと妻へ愚痴
流れ着いた岸辺で小さく小さく咲き
洗濯とお針で綴つた母の一生

高槻市 傍 島 静 馬

ご厚意に甘えっぱなしでいる非力
どう見ても末っ娘夫婦出来が良し
色眼鏡かけた自分に気が付かず
メガホンへ協力まばらなターミナル
鯨肉とわかつてテキを食べ残し

堺市 吉田 圭井堂

身なりでは判断つかぬ預金帳

今日も亦餌を求めてまっしぐら

いたずらに馬齢重ねてうとまれる

ほどほどの遺産法事もなごやかに

清らかな流れは過疎の近くだけ

宇部市 平田 実男

本心がうっかりあくびになつて出る

育児日誌あくびの数も書いてあり

欠点も云うセールスで買うと決め

はがゆくも頼母しくもある口ごたえ

逃げ道をつくつて叱る親の愛

大阪市 本多 柳志

年輪の不足ピエロに成り切れず

ご無沙汰を旅のカラーでお詫びされ

六十年愚行もありしふところ手

丹前の着流し守銭奴とも見えす

告別式物心ともにけりがつき

和歌山市 垂井 葵水

經理士に店の素顔をのぞかれる

つぐなつた方の噂は拡がらず

ママの愚痴聞く勘定はこっち持ち

福豆をひとつこぼしたままの歳

初めから藻はにせものと金魚知り

東京都 増田次章

憤り吐き出しながら悔いはじめ

一行の活字人生変えさせる

大衆の声と称するひとにぎり

子の饒舌頼もしい日とうるさい日

知り合わぬまま去りがたい席隣り

大阪市 橘高薫風

なお会わず冬木は黒い血管図

牡丹雪 聴覚 視覚より敏に

夜の長さ襖をあける猫がいて

水仙にはあたたかすぎる風邪の部屋

便り来て咳こぼれたり うれしい咳

大阪市 不二田一三夫

手のひらの中にいるよな素振り見せ

ハーモニカ川口章吾に習ろた父

新聞読むのが仕事のような 夫

寄席(二句)

台本にないのにエロや蹴る殴る

漫才をザイ界などとシャレている

鳥取県 川崎秋女

伯母死亡(一句)

たっぷりと枕辺におく寒の水

未練などないと自分に言いきかせ

金のない弱さ末座に小さくいる

愛猫の野性にかえる寒の明け

出雲市 原 独仙

ドライな娘今日成人のしとやかさ

目立なく遊びはるなら良しと妻

晩酌の宵寝が覚めてまた寝酒

金婚日の妻へ

五十年よくぞ航路の舵をとり

貝塚市 野坂つき子

奈良のお水取り(一句)

二月堂絵になる雪も降ってくれ

充ちたりているから噂気にならず

意志表示すれば傷つく人がいる

いつまでも歩いていたいのも女

門真市 福島鉄児

動脈硬化の軽い発作起ころ

まだ生きる欲あり医者に逆えず

酒煙草遊びもやめてなぜ生きる

子のために生きねばならぬ葉のむ

絶対安静そんな余裕がありませんか

大阪市 室谷徹舟

煩惱がネオンの街へすい込まれ

ガード下ドラマのように靴響き

鶏に食わして貰う餌をやる

老いの恋見せつけられた旅館街

大阪市 吉岡美房

やきもちの拍手もまじる披露宴

大阪に生れ子等にはない故郷

同情はするがそれからまともらず

他人だから悲惨な事故の処理が出来

大阪市 木村水洞

大阪の空気に馴れて来た雀

くだをまくために飲んでる縄のれん

親に似て嘘が云えない長屋の子

鍵屋の辻

討つ者も討たるる者も武家の道

八尾市 香川酔々

死角だと思ふ末座へ風当たり

福笹が揺れる未来を生きる手に

締切りを五分延ばそうボス遅参

雑用も出来ず口先だけ達者

桜井市 岩本雀踊子

ぶら下る熟柿ねむるような村

生き甲斐のある雑念は払うまい

ささやかな慕情他人の目がこわい

気持ち良く酔って釜ヶ崎の春

鳥取県 森田布堂

帰省子に白髪を抜かず母となり

遺骨待つ老母に墓標朽ち果てて

雨だれのリズムも春が奏でられ

新鮮な水で金魚の死を早め

高槻市 若柳潮花

寝煙草を子に叱られる歳になり

ウーマンリップすねた女のあい言葉

ふるさとの話出稼ぎ輪をつくり

悔いだけを残して女燃えつきる

高槻市 福田丁路

その先が思い出せない梯子酒

バス代に一万円の札で揉め

六十才の抵抗洒落たベレー帽

思い出の丘がうたてや芥捨場

広島県 高橋鬼焼

飲みたらぬ酒でもいいさ妻の酌

振りむけばピッコの影がついてくる

笑うまい音痴の唄にあるリズム

歩けない足をさすって雪の唄

神戸市 小浜牧人

浪人は昼の風呂さえ味気なし

ウーマンリップ未だしマキシ重たそう

電柱も塀も選挙が近いなり

カナリヤは窓から春を呼ぶごとく

鳥取県 谷 無 閑

山里は梅の香りで春を知り

無人駅淋しく続く過疎地帯

宣伝車子供が追えば母も追い

成人式売物らしく皆飾り

大阪市 神谷凡九郎

俺は俺ダヨとうっすら分りかけ

裸になっても心を隠す皮膚がある

泣いて笑うてその上怒る事もある

無駄だとわかってるから人間性いどむ

倉敷市 小 幡 里 風

子の自慢画紙をはみ出す母の顔

帰省する洗濯物を母が待ち

赤い顔何か見てまた女の子

人妻という距離にして歩を揃え

倉敷市 藤 井 春 日

養老院嵐にもまれた吹きだまり

正論を吐けば左遷が待っており

小走りに粉雪抜ける窓の束

病弱ながら還暦を迎う

手をとられ六十路の坂を一つ越し

守口市 村 田 瓢 太

白黒じゃ惜しい京都の春景色

連休を遊び疲れてまた休み

うたがうこと知らぬ女房の目が怖い

新入社みんなきれいな目をしてる

愛媛県 渡 辺 暁 童

無事な旅備品と書いたふとんに寝

見込み違いは妻の入れ智恵

四面楚歌勝算度外自己主張

友の計へきつい自制も二三日

松原市 谷 垣 史 好

残された肺いっぱい春を吸い

断崖は女を置いて見る景色

原点にかえれとカッコいい議論

席譲った方が逃げるように立ち

下関市 志 賀 木 石

じれったい人ねと女酔うている

そろばんの先立つ人で親しめず

さげすみの色もまじった苦笑い

スモッグではないかと霞うたがわれ

小松市 浅 野 芳 朗

役ついた名刺妻にも見てもらい

公園の鯉人声へ浮いてみる

いつまでも紅茶かきませてる失意
スモッグへ風船溶けたように消え

愛媛県 村上旭童

立て板に水でしゃべって見たい僕

奥さんの怒った顔が美しい

そのうちに社宅追われる歳で酔い

嫁というものの強さを認めあい

笠岡市 木山遠二

目が合っただけで嬉しいおない年

苦悩聞いてくれてそれから近寄らず

遠足の朝を雀もよくしゃべる

妻は洗濯日曜の朝はよし

米子市 八木千代

虹を見た日から変えない散歩道

コンピュータよりおみくじに縋る恋

どうにでも染まる白紙の夢と居る

息子の縁談に

娘を離すひとのころを忘れまい

宝塚市 中村ゆきを

肝心のことは云えずに泣きじゃくり

ころんでもただでは起きぬのも筋筋

鍵っ子の走るたんびに小銭鳴る

晩年の何故か父の酒は荒れ

大阪市 宮尾あいき

寒いなんて云うまい銀杏の芽が丸い

もうすぐに嫁にゆくのにまだデート

人並に生れて何が整形科

もう気にしていられない程白髪ふえ

倉敷市 水粉千翁

また咲いた梅の白さへ目を閉じる

吸殻を貯めて話せば判るもの

生涯をピエロとなって幕を閉め

独り言紙人形が出来ている

竹原市 山内静水

建増築(二句)

職人を困らせながら妻の城

不器用な息子もさげる釘袋

素顔のまままでマキシィ似合う嫁

断絶をほぐす息子と酌むビール

京都市 松川杜的

銭投げていた三番街のベレー帽

カタンカタン水を聞いている僧孤独

停年退職に憶う(二句)

独り出る庁舎螢雪口ずさむ

停退の暗さ吹っ消す柳友があり

京都府 大鶴喜由

唄よりも唄の中味が好きな唄

自分より他人に見せたい枝垂梅

まるで明日がないように踊りくるい

父と母嘘の喧嘩で子を諫め

豊中市 戸田古方

煩惱のその紐一つ絶ち切れず

お早ようさんだけで結構喜ばれ

おあいそに貰うてポケツに入れたまま

祝祭日とにかく休めるだけでよし

倉吉市 奥谷弘朗

女房を孫に取られてする自炊

この雪にオムツを洗う妻哀れ

孫の守こちらが泣きたいようになり

自転車が性に合うのも小役人

米子市 林瑞枝

反省の帰宅へ老母の優しすぎ

公害の喘息左遷されて癒え

下手な嘘云わせ税務署炎をすえ

梅活けて恋人待つかの如き祖父

名古屋市 吉田水車

背水の陣定期券を買い

リバイバルいっそチョンマゲ結いなはれ

コンピュータ人間の価値定まられ

三葉葵こんなはっぱへ土下座させ

藤井寺市

西いわを

正論なれど口下手敗けとなる

早春を飛越して来た四月馬鹿

冬のバラ花卉そのままひらかない

エヤメール父の病は伏せておく

下関市

国弘半休門

きかぬ子だなアと親の方へ向き

やけ酒の飲める男が羨やまし

自惚を警戒し合って仲が良い

背信の恋はそわそわしてばれる

大阪市

天正千梢

一人居の気楽さ落目もつくらわす

綿密にしらべて質屋札を出し

個人差はあるがと統計をたてにとり

ただれた心 観音様が抱いてくれ

奈良県

石倉旅風

サラリーマン算盤おかず残が合い

町角の店を覚えて宿の下駄

言い過ぎたあとにひと言添えておく

高いこと承知の方の店で買う

京都市

都倉求芽

売店の色本 朝陽に恥じている

酔っている姿をおのれにも誇示す

脱税の老舗今日も流行ってる

子供等の話題にさえも万単位

出雲市 弘津柳慶

ゆげの中声で男女を聞きわけける

神殿の松の年輪へ値踏する

木枯へ池の鯉は動かない

玄関へ出て積雪へあわてたり

松江市 中川晃男

コンピュータある時すねた答え出し

素人はそれで困ると見くびられ

加減して言えば調子に乗ってくる

切符切る合間も鉄鳴らすリズム

堺市 河内天笑

頭からっぽにしてパチンコ屋に這入る

君となら歩いてみよう酔ざまし

女湯に女がひとり桶の音

出戻りへやっぱりうちの水が合い

今治市 越智一水

いみのないことばで通じ合う夫婦

すて石になってうれしく雨も受け

遍路笠振り向かぬまいつか消え

風みどり腕と肩とをくめという

八尾市 高杉鬼遊

毒草はより美しく咲いて見せ

スブン響かせて子といる妻といる

定年の小さくなった名刺持つ

天気清朗大気汚染注意報

堺市 藤井一二三

葉巻吸える身だから丁稚の頃が言え

几帳面な机で出世をしない椅子

水の幸も知らず造花の可憐なり

二月十一日柳生を訪ねて

商魂が七分どおりの水車小屋

兵庫県 遠山可住

ボケましてなあとますます口達者

雪あかり捨てるに惜しい過疎の徑

要領ようやれよと左遷肩叩く

温泉の雪はドテラで歩くもの

小松市 馬場魚山

日記帳抜け毛ひとすじ落ちていた

消灯になってイヤホン出してくる

除雪車の来ない所に市民税

居据った気圧へ今朝も冬が吠え

兵庫県 河原みのる

腐らせた恨み農家は従いて来ず

改修は先ず魚棲めぬ川とする
タイミンダ外れたキトク持て余し

部落内最高齢となる

彼の岸の波がヒタヒタ足濡らす

倉敷市 小野克枝

宿命にねじ鉢巻きをする女

夫婦とはこんな小さなことでもめ

喪の日さえ女きれいに化粧する

少しづつ貯めた吾が子のプレゼント

奈良県 草深醉升

春闘へ老後の不安なお募り

初詣り十年振りの友に会い

言い負けた妻に心で掌を合せ

じっくりと漢方薬でも飲むと決め

鳥取県 清水一保

文明は今日もPPMでもめ

人生は所詮宇宙のちりと知る

好きだとも云わず日本に渡り鳥

公害へ虫も必死で身構える

和歌山市 野村太茂津

平凡へ破乱万丈綴り了え

日本画日本の心で感動し

暴発も出来ない年で軍歌聞く

ふり向けば一緒に飲むと云う視線

奈良市 宮口笛生

雪やこんこん公園の鹿野性めく

母の伏す部屋母に冬の風抜ける

見舞品その俛老衰の母となる

太い足女は冬を寒がらず

大阪市 有信新之助

すし屋のふきんあれも拭きこれも拭き

しがらみの中にいるから美しい

キャッシュでと耳障りのよい電話

ざまあみろタクシーずらり日曜日

笠岡市 木山要次

女上位も結局夫の印が要り

深水に描かせたいよな日本髪

D51の喘いだ缶に錆冷える

鏡台も埃で妻に相済まず

島根県 小砂白汀

飾物の一つにされて通夜にいる

あるときはつらら曲つて見たかろう

涙まで添えたにお世辞見やぶられ

気ごころがわかり饒舌とりもどし

岡山県 浜野奇童

サヨナラのテープ車窓へしがみつ

ピニールへ旅が終った濡れタオル
自転車も来ぬ信号へ待たされる
改心をしたのにドラマ突き落し

神戸市 仲 どんたく

便利やからボーイフレンド連れ歩るき

老二人寛美に泣かされ笑わされ

盆栽のように刈られて定退す

定年へ日めくり枯葉のように散り

堺市 高橋千万子

先約があると手帳にことわられ

出た人が違い受話器をそっとおく

ハイミスの縁談親も娘もあわて

寒風の梅は必死で咲いて見せ

善通寺市 岩田ひさお

父親が嘆いたように子を案じ

悲しさへおんなの細い細い線

ひとり娘の恋へ妻ほど割りきれず

ドレスメーカーへ妻入校

手習いへはにかむ若さまだ残り

富田林市 岩田美代

捨て犬の瞳が哀しくて去り難し

寒月が虚勢の肩をすばめさせ

新調をうっとり締める帯が鳴り
はばかり泣ける憩いのペタル踏む

大阪市 西川誓二

積雪に埋れた故郷も若葉萌ゆ

門出から学歴と云うハンデイ負い

皆が皆嘘の涙に泣かされる

友情に溺れまたまた借が出来

伊丹市 小川静観堂

軍人だ新婚旅行なんか知らなんだ

嘘のない夫婦仲は美しきかな

同期生会の勧誘来たる亡妻宛に

ミニミニ中肉中背の人の妻

和歌山市 西尾公作

別人かと思うマダムの昼下り

帳付けで飲む気マダムをおだて上げ

カンニング出来ぬ教師のやぶにらみ

冷戦の父母をうかがう子の真顔

堺市 伏見茂美

彼からの電話父にひやかされ

恋もえて母の過去まで聞きたがり

隣のスピッツ(一句)

飼主がヒスだから犬も似るのかな

犬の首押さえ野鳥をきく散歩

大阪市 小出智子

松過ぎて戻る賀状の薄汚れ

坂道に来て自転車の子に越され

ほろ酔いの父の話にうまが合い

暖かい色着てみたし春曆

竹原市 小島蘭幸

本番は実力どうりとはゆかず

憎まれているが反面うらやまれ

給料日から二三日ほっとする

これっぽちの保険の満期でもうれし

鹿児島市 土岐トク子

白柳先生によせて(一句)

ここかしこ師の笑み囲む話のつきず

浪人の決意あらたにくぐる門

黒潮もなごみ岬の春だより

大正のウーマンリブは売れのこり

大阪市 江城修史

次兄三年忌(一句)

酔い痴れし面影追えば氷雨降る

平行の愛の尺度を計りかね

生きる汗知らぬ小指の長い爪

追憶の彼方に赤いバラ一輪

笠岡市 松本忠三

出世した友が貴様と俺でなし

献血の女房の腕が頼母しく

寝台車廂の主は何段目

大阪市 中川滋雀

ほろ酔いの地下を上げれば臙月

とりあえず義理を果した見舞状

尾ひれまで付き倒産の名を広め

大阪市 河井庸佑

受験の子いるのか灯りまだ消えず

通勤車いつものとこにいつもの娘

お互に逢うてはならぬ人に逢い

富田林市 浅川八郎

結核や中風までも相続す

中風病み地獄の門で一休み

髭ぼうぼうマナーを忘れた訳でなし

下関市 桜川不水

三月一日退院決定

七十三にして知る妻の妻たる

皺くちやの手と手を離さないままさすり

胃カイヨウ病院中では巾がきき

大阪市 太田良子

特売場何も買わずにすられて来

弁当がほしい主人へ早起きし

物云うたら喧嘩になつても夫婦

岡山県 池田古心

百姓を継ぐ子へ馬鹿と怒鳴り度く

灰皿があるのに灰は膝に落ち

暖冬異変蛙あきれて又もぐり

大阪市 本庄金三

冬の京

植物園木枯にデート寒かろう

お母はん真ん中にして行く夫婦

切符切る男車掌の京なまり

小松市 四方天弘美

同吟に音痴遠慮のない地声

あっさりとお老衰ですよと見放なされ

白い嶺魔性隠して晴れ上がり

岡山市 林 葵丘

祇園にも近代化という週休日

ウーマンリブもらい手のない顔がより

金比羅の石段五十の意地をみせ

尼崎市 高津徹也

薰風へ一鍬入れる市の仕事

子供の日すその子の子のみの日となれり

墓参すみあとの予定は孫まかせ

芦屋市 丸川初甫

一人来て二人連れ立つターミナル

屑屋には屑屋のプライド立派です

安定感貯めているなと思う顔

西宮市 兵井虎声

ふがない主人表札が泣いている

人間のエゴがペットを育ててる

交わらぬルールと知って走る恋

大阪市 児島与呂志

金剛の樹雪粉雪になって舞う

鈴鹿への峠直角に登る足

生きているからわかる自然の鼓動

大阪市 福井野迷路

値下げして新製品と名付けたり

お薄でもと昼寝の夢を噛みしめる

爛と水割り世代の交代

松江市 岡崎祥月

笑う門福来る福の豆をまく

鬼になる俺へ子の豆孫の豆

真実一路愛情を抱き妻と老い

姫路市 隠岐不酔

恩返しなどと兄弟子負けている

買えもせぬ人の空地に値ぶみをし

シクラメン下を向いて花が咲き

堺市 新谷笑痴

いつか皆死んで行く身へなげ怖い

生きる為紅の色にも齡を塗り

太陽の温み野良犬まで届き

松江市 小林孤呂二

ビルに囲まれ鬼瓦は陽をわすれ

ふだん着だけは妻の選り好み

いづれ手放す娘へ女らしさを求め

岡山县 大森娛句楽

年寄の袖引き合うて善光寺

八ツ橋の土産変らぬ古都の味

観光へ一役買うたか雪が降り

東大阪市 竹中肖二

桜草植えて花壇に春を見る

優先の車がぬかるみ跳ねて去り

そう云えばあれが別れに来た言葉

大阪市 今西章雅

あやつり人形にいつそなりたい日のわたし

無神論情性で仏壇守りをする

真すぐに帰って欲しい靴磨く

笠岡市 出原真奇

素人の修理は電気にかみつかれ

子等巢立ち犬の写真が増えてくる

新築を賞めて一本追加が来

高槻市 山田季賛

夜間料金になっていじまし恋電話

控え目に話せば他人に馬鹿にされ

生活がかかっているお互に話合い

守口市 羽原静歩

過疎の土に還るいのちの朝が明け

こぬか雨降るとも見えず野の仏

送られて人の心に泣かされる

岡山县 出原敬一

最新の設備へ入院する不幸

このままで済まぬと石へ吠えて逃げ

二里先が火元と聞いて又眠り

平田市 久家代仕男

豪雪(二句)

雪見酒どころか屋根が潰れそう

雪景色峠へ続く冬木立

物騒な世相隣も犬を飼い

大阪市 川口弘生

チャーミングなおめめ褒めたら近視です

石丈も近所に合わず墓地公園

スタートにつまずきゆっくり行くとする

姫路市 村上春巳

舞い降りるきれいな水面無いかもめ

義兄の死から

臨終の床でなにかを眼がわびる

犬にさえしたわれていた人という

松江市 柳楽鶴丸

バイオリンとピアノ親と子の対話

風葬にしてほし僕は無神論

一輪差に僕と妻の花を生け

西宮市 島居百酒

捨てたのに拾われ礼を云うて受け

左遷地に穴場があつて気を晴らし

意地だけで食えぬと識れどさりながら

岡山市 行吉照路

目礼をされてニヤッと笑つとき

公害の街がネオンで化粧され

マイカーの自覚助手席に子を乗せず

和歌山市 土谷城石

うらやましお噂などとおだてられ

けたたまし噂近所のお嫁入り

素顔ではやっぱりマダム年は年

竹原市 森井菁居

梅ひらく見てくれようがくれまいが

腐ってもサボテン刺をピンと立て

散るまでをせめても椿清くいる

大阪市 宮地双楽

伸び過ぎた事業不況に赤字ふえ

米の値が安いは農家ばかりなり

造花とも知らずに遊ぶ蝶かなし

大阪市 河野君子

姉妹四人一緒に旅して

絨氈を踏む感触にある我が家

肌の冷え湯槽に溶けて唄が出る

長すぎた昼寝へ疲れぶり返す

大田市 藤田軒太楼

雪溶けを待ってたように茶飲み友

養命酒だから女房大目にみ

張切った出鼻へ水さす妻のぐち

岡山県 横山 一声
無免許が警官人形はねて逃げ
公書に便乗して倒産し

唐津市 新岡 回天子

初孫をみる楽しみの曆くり

お隣が見えて垣する露地の奥

八代市 永松 道雄

觀光ブーム世界を跨ぐ宝船

振り向いて旧師の丸い背を拜み

倉敷市 竹内 翁童

孫と来てつかれましたとふれまわり

安眠の出来た倒産の決まった日

★ 若本 多久志

宗右衛門町（二句）

大和屋を出で春らしい夜が匂い

二次会へ付合いと酒が苦い酒

言いにくいことがまだあり老夫婦

こんな風に死にたい事もエゴイズム

手をつけてあやまられても空虚なる

北川 春巢

正月からのピラ選挙まで生き残り

議事堂は居眠りをさす椅子にでき

リハーサルの螢の光では泣けず
院長に業務外業務などはなし
舞妓から知らぬ世界を教えられ

西尾 菜

上目使うて後悔なんかしてまへん

ポケットから出す躊躇らいを見つめられ

かりがねの絵を描く如しタクト振る

マネキン人形も脱げば一寸したエッチ

軽るい厭へ毛糸編みつづけ

菊沢 小松園

唇を奪われてからルージュ濃し

柳植えかえて都心に触れんとす

標本になる運命の蝶止まり

容体と関りもなし時刻む

翹取れたのも混ってる干羽鶴

川村 好郎

信順一筋生かされている限り

南紀にて

全快を寿ぐごとく岬齧れ

見飽かない紀伊松島の海の色

串本節花代ほどの声でなく

那智の滝バックにええとこ撮られていず

川傍柳 初篇 研究

(九十三)

前田喜代人 川端柳風
 岡崎重義 故 高須唾三味
 清博美丸 十府
 藤井和雄 岡田甫

568 いらぬ事下女ハ百度目を配り

眠狐
 藤井||いらぬ事はムダなこと。百人一首では嫁は名手、下女は下手、乳母は乱暴ときまっている。ついに一枚もれず、ただ目をキョロキョロするばかりの下女。そこだよといわれて下女も一首取り

歌かるた下女片隅で大きいき 二八・九
 歌かるた乳母はにぎってたたきつけ 九・三
 二八・四

川端||賛
 花嫁の手ぎわ秋の田苺のごとし 二八・四
 下女手がら百人の首三つ取り 三七・16
 歌かるたつんぼは下女と餅を焼き 五九・7

歌かるた嫁取ったのに下女さがし 二八・6
 歌かるた人づてならで下女取れず

二八・9
 川柳では嫁は上手で、下女、乳母は下手ということになっている。

高須||「百たび目を配り」は少し大げさだが、とにかく歌カルタ遊びに入っている下女の下手さを詠んだもので、下女奉公に来たからこそ、こんな上品な遊びの仲間になつたわけで、下手なのはあたりまえ。

丸||賛。礎稿堂に入ったもの。
 岡田||「百たび」はそれで百人一首を暗示した古川柳独特の表現法。
 569 石が声色馳走の巻ッ也

川 弓

藤井||伊勢の宮川の渡、志摩の磯辺にあるのが最も有名であるが、物のひびきに直ぐに反応してくる石を「鸚鵡石」という。やがて俳優の声色をつかう為はその台詞を書き抜いたものを鸚鵡石というようになった。従つて、鸚鵡石のように俳優らの声色

をして座興をそえるものも、馳走の一つであるとの意か。或いはそのものずばりで、伊勢では物云う鸚鵡石を珍らしいから客へのもてなしの一つであるの意か、どちらかは自信なし。

川端||宮参りのついでに見物に立ち寄り、何か云つてその反響音がまた一つの興をそえるのであろう。

高須||伊勢の鸚鵡石に間違いなし。案内してきた人が自慢気に「何か言つてごらんなさい」といひ、それをコダマした鸚鵡石に皆が感心したのを「ご馳走の一つ」と見なしたもので、ちょっと面白い句。

丸||女客のもてなしに「あふむせき」(俳優の声色を書き抜いた刷物)を出して見せる関係などであろう。伊勢宮川の鸚鵡石そのものを詠んだとは思われない。鸚鵡石については守貞漫稿に詳しい。
 岡田||伊勢の鸚鵡石は伊勢路から八里ほど

山の方へ入るので、有名でもわざわざゆく人は少なかつたろう。磯稿に、宮川の渡、志摩の磯辺にあるといわれているのはまちがい。磯辺にもあるが真似石で本ものは山中にある。やはり小生も芝居の台詞のサワリの部分をおさめた本と見たい。

570 常盤の国へ嫁逃るむつかしさ
梅 芹
藤井例によって松ヶ岡東慶寺の句。「常盤の松」と「松ヶ岡」とをかけただけの話。縁切り寺に嫁がかけ込んだので、事めんどうになったというところ。
川端嫁が逃げる場所は松ヶ岡。
丸・岡田賛。

571 鯨の油で煮た牛房下女ハ喰
五 扇
藤井牛房を油でいためたもの、きんぴら牛房も、油に下等な鯨油を使用したものは下女用だ。雇人用と奥用と二通りにしたのは、封建時代の屋敷の風がしのばれる。
高須今でいうキンピラゴボウにやわらかな植物油を使わず、かたい動物油を使ったところが下女の料理で、当時クジラ油は後で鍋を砂で洗ったほどきらわれたものである。

572 ぬけそうもないのハ鹿島の留守也
泉 河
藤井伊勢詣の留守中に女房が不義をする
と神罰で抜けなくなるといふ迷信がある。
抜けぬぞと女房をおどし伊勢に立ち
末一・10
鹿島神社には、地震のなまずを庄さえてい
る要石があるから、鹿島詣の留守の不義も
同様な神罰があるだろう……といううが
ち。理屈からいっても
伊勢よりも鹿島の留守がぬけぬ筈
末一・29

岡崎不精もの下女ではないか。クジラの油は砂でこすらなければならぬのに、クジラ油のついた鍋をろくに手入れもせず、ゴボウ煮に使ったので、はからずもクジラくさいキンピラゴボウになったのを食

573 させべき時にさせざれば咳が出る
五 雷
藤井後に出てくる「子ノ日といつては咳をせき」と同じケース。「労咳のぞやみやたらうづく也」の初期に満たしてやらぬ

と、あたり労咳にしてしまうぞとの警告。「させべきときにさせざれば」と真面目な句調が却っておかしみをさそう。この句は男性・女性共通の句ではなからうか。

前田賛。はじめの「させべき」は「さすべき」が正しい。「が」がよくきている。しかし次のようにもとれる。四火の灸をすえなければならぬ時にすえないうか。病が進行して咳が出る。どうであらうか。清磯稿に賛。「させべき」は恋であらう。労咳は主として娘の病いだから主題句も娘を詠んだ句としたい。

丸磯稿賛。「為せべき」はやはり磯稿のごとく見る。特に男女を限定する必要はないようだ。
岡田同。なお前田説の通り「させべき」は「さすべき」が文法上は正しいが、ここでは「させるべき」の省語と軽く見ておいてよからう。

後藤梅志著

「秀句鑑賞と

梅志句集」

送料共 五五〇円

三島由紀夫が派手な割腹自殺をしてから百
余日が経った。

事件突発当時、地元のあるマスコミから、
彼の死について何か書いてくれとの注文もう
けたが、時間が経たねば書く気がしない―と
返事をしたことである。

いわゆる三島事件が突発したとき、日本中
のありとあらゆるマスコミ関係は完全に頭へ
血がのぼり百家騒鳴もただならずであったこ
とは御承知の通り。たとえわが家の場合に
しても、日ごろモノに動じないウチのかみさ
んも、終日テレビにかじりつき、内職もほっ
たらかし、娘は娘たちで毎日のように入れか
わりたちかわり、三島特集の週刊誌を買いか
さり、私の前に積みあげていくという風であ
る。何がなんだかわか
らないうちに、私も多
少はエキサイトさせら
れていたことは事実
だ。しかし、百余日を
経た今となってみれば
この事件はやけにあっ
けらかんとしていて、
私の胸のどこにもなん
の形骸も止めていない
ことにむしろあきれる
程だ。

と川柳 東野大八

さて、こうした事件
の中で、三島と陽明学
を結びつけ、狂気にお
よぶ週刊誌が二、三眼

について。陽明学といえは私の郷里、四国の
大洲市の古城が眼に浮かぶ。そこには中江藤
樹の銅像がある。かみしも姿で正坐した至極
律義な姿のそれである。幼時、私はこの藤樹
先生は陽明学の鼻祖と教えられ、親父からそ
の学問の手ほどきを受けた覚えがある。親父
の頭の上に、知行合一の額もあつたことだ。
陽明学派で知られる人々は、この藤樹の門
下に熊沢蕃山父子があり、吉田松陰、大塩平
八郎、西郷隆盛がいる。三島流でのマスコミ
によれば、この学派の末路は総じて悲惨な最
後を遂げると記している。殊に大塩平八郎
は、三島とともに四十五歳で憤死した点を強
調、大いに関連づけている。大塩らの天保一
揆の記録を調べてみると、その檄文は「民を
用い、君を誅す」と神武や天照を引合いに出
し、スローガンとしているが、騒ぎの目的は
幕府の浪速奸吏のぼく滅にあつた。三島のや
り口と似ている。大塩中斎の学説は陽明流の
大虚にあつた。大阪西町奉行矢部駿河守は、
藤田東湖にこう話したという記録がある。
「平八郎はカンシヤク持ちで、それが若年
に名与力の素質をなした。しかし、彼と密談
した際、談たまたま蔓國の言に及ぶや、金頭
（ほうぼうかながしら）の焼いた石の如く固
い魚を、頭から尻までガリガリ噛みくだいた
ので、用人は、彼は狂人かと真顔で言った」
また大塩は、佐藤一斎に自分の労作、洗心
洞割記を贈って評を乞うたが、一斎いわく
「自己にて大虚と覚え、その実、必固我の私
を免れず」つまり自我の塊りだと酷評したわ

西尾 葉著

句集「水鶏笛」

送料共 六百元

序文 麻生霞乃先生・中島生々庵主幹
あなたの書架に香気を放つ

けだ。

王陽明晩年の伝習録書簡にこうある。
「余は上天の加護によって、はしなくも良
知の学をうかがうことを得、これによってこ
そ天下を治りうると確信した。それゆえ、斯
民の陥溺を思うごとに威然として痛心し、身
の不肖なるも忘れてそれによって救済しよう
と志した。かかる身のほど知らずの所行をみ
て、天下の人は嘲笑諷刺し、狂人よ、喪心者
よとよぶのである。ああ疾痛のわが身に切な
るこの際、人の嘲笑をかえりみようとまが
るるか。父母兄弟が深淵に墜落しようとする
をみて、号叫しはふくし、はだしでころびよ
り、断崖にぶら下って救おうとする。これが
人間の情である。しかるに士大夫は、そのか
たわらで談笑しつづ指さしていわく、礼儀作
法を忘れ、衣冠を捨ててかくも見苦しく叫び
まわりうるたえさわぐことよ、これ必ず狂人
ならん、喪心者ならん、と。(中略)

三島由紀夫

ああ、今の人、余を狂人、喪心者よと呼ぶも不可なし、天下の人の心は、みなわれの心にほかならぬ。天下の人、なお狂を病む者あり、余はどうして狂を病まないでいられようか。なお心を喪う者あり、余ひとりどうして心を喪わないでいられようか。

三島事件を契機に、狂気がマスコミに流行したことが、陽明学の右に掲げた関連に抛つているわけである。王陽明の弟子には「狂こそ聖人」というのまで現われたが、その筆頭に王竜溪がいる。

禪には、漸と頓がある。朱子学は漸で、陽明学は頓だといえる。朱子学の格物致知は、ピラミットの石積み如く、下から上へと積み重ねて頂天の不動の真理へと到達する。いわゆる考証学派といおうか。

ところがこんなことをやっているのは、道理を極めるなどいつのことかわからない。荘子いわく「人の生や限りあり、人の知や限りなし、限りあるをもって限りなきを遂う、危いかな」三島美学は漸を遂って頓に敗れたといえはいえぬこともない。

朱子学以前の漢唐の学問は、本格的に漸で

あつたが、宋におよんで頓に向つた、と禪学にある。頓とは何か、一名頓悟という。タケノコを掘っていると、クワの先が地竹に当たって土底で音を発する。ハツとして悟つたのがいわゆる香嚴擊竹だが、この自己中心の悟りに焦点を据えることが、手取早くいえば陽明学とも解釈できる。

王陽明（一四七二—一五二八）は、継母で育ち、流罪のうき目を見、それから立身して農民一揆の反乱鎮圧の司令官となつたりしたが、肺結核を病み、結局四十代半ばで死ぬのであるから、その学説の発想は頓たらざるを得なかつたのである。

ところで、中国の「笑府」は江戸小ばなしのタネ本になつた漢民族のユーモア古典だがここでは宋学を眼の仇にしている。このことは頓悟へのヤユでもあるうか。この笑府には陽明学派の議論好きをコキ下ろしたのが随分とある。人間の滑稽、風刺を頓生ボダイのエキスとみた人間の実性が、中国渡りの道学をひねつた江戸の儒学のインテリの手すさびで江戸小ばなしを生んだ。なぜそうしたものか飛び出してきたのか、ひつきう彼等も頓禪たらざるを得なかつたのであろう。青年老い易くして学成り難し、しよせん日本人は頓向きにししか生きるすべもない本性にあるのだというはかはない。

——美学とはきわまるところ第一つ
——美学といふは私を作つたことだが、三島の首が落ちたのは、結局人間の俗性を謙悪したことにほじまるのだと私は考えている。その

俗性とは何かといへば、日本流の江戸前のそれ、彼は西洋美学でポディビルを試みた典型的な作家だと考えるからである。

日本の卑俗な風流にまで眼を置かず、あちら流の美学に首まで没り抜いたところに、彼の文学の限界があり、悲劇があつた。三島由紀夫が川柳を手がけていたら、あんな妙な服を着て、ハラを切らなくてすんだであらう。戦争体験の除去からくるコンプレックスもそれに輪をかけているとみればひがめか。旅行である。その体験主義の信憑性のため、能因法師は旅に出たということを実証するために、窓から首を出して陽に焼いた。そのことしか旅への証明はなかつた——ある座談会で三島はこうのべている。その能因こそが彼自身であつたわけだ。窓の陽焼けは首にまで届かない。川柳のほてりでもあれば、その首に皮ぐらひはついていてたであらう。

阿万万的
松川杜的
共著

句集「的」

送料共 四百円

序文 中島生々庵主幹・正本水客氏
あなたの書架にゼヒ一冊！

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

戦傷へ日の丸立てぬ意地をもち

越智 一水

日の丸に半旗は似合わぬ、戦破れて後は祝祭日にも街に日の丸は殆んど見ない、これも島国の意地か、淋しいが本当のことである。

野ら猫の根性生きて行く目つき

清水 一保

野生の強さ、命に係りのある絶対の強さ、人間の世となれば多少の凶太さが無くては生きて行けないそれをこの句は言外に教えて呉れる句柄の強弱さを頂く。

子を寝かす童話の国も深い雪

八木 千代

美しい画を見る川柳である。音のない世界の夜の母子像にアンゼルスも微笑むであろう、雪の深い山陰ならではの句である。

老鳥は籠から出ても羽ばたかず

馬場 魚山

老醜の詩である。その昔鷺を鳴かせた梅の木も今は余命も枯れて実も宿さず、釈迦の無常感も老化は避けられないとして居る。

席ゆずる時を逸して目を閉じる

増田 次章

詠み古るされた例の句ではあるが、時を逸したが、人間の性善説を裏書して居て面白いと思う。目を閉じているバツの悪さよである。

抱擁をすり抜けてゆく台所

高杉 鬼遊

遁れて行く所が台所であって見れば決して奥さんでは無い。場面の滑稽さもさること乍ら、この後お暇を乞うようでもなればドラマ的な要素も多分にある。中七がうまい。

どの指もみなそれぞれに持つ役目

土谷 城石

軽いが意味の深い句である。皆が見過している境地から拾い上げた細心さを買いたい。

今年また添えず除夜聞く寮ぐらし

藤井 一二三

上五のまたが千金の重み、寮生活で聞く除夜の鐘、道具立が揃っていて然かも残酷。

むきあえば女の言葉に負けている

高橋 鬼焼

うまいと思う、判り易い平語俗語で本当の人間性の探求にある程度の深さを剔出したこれこそ川柳の本道と言いたい。

仲人の嘘を承知で嫁くあせり

林野 麴光

栄光の陰に涙あり、得意気の仲人の顔も何も彼も承知の当人から反って阿呆に見える。真実の厳しさがよく出ている。

性教育薄々知ってる目に合合い

平田 実男

中七のわざと呆けた言い廻し方が効果的で憎い、テレビ、ラジオで近頃のませた子供は先生の説明がもどかしい目が笑っている。

頂点に立って孤独をかみしめる

安平次 弘道

最高と最低はいつも孤独である。その間のどちら附かずのちよぼちよぼが賑やかで面白い。英雄の心緒の乱れは今に始まった事では無い。

釘でさえ素人玄人をよう見分け

隠岐 不酔

嫌味のない擬人法、無器用な人間も斯うはんやりたしなめられては腹も立てられぬ、句に詰ったら立場を変えて見たら、又新しい詠み方も出来ると言う見本のような参考になる句だ。

★

▼路郎忌の兼題は七月一日着便で本社へ。

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

叩いた母のみじめさをまだ知らず

小出 智子

母親としての複雑な心の中を、旨くよんだ佳句です。みじめさが女親としてよく効いています。句評に出ると、まだ知らずで、作者の位置が問題になると思います。叩いた母は作者自身か、作者の母かということになりませんが、これは作者の母を詠んでいます。

ギター卒業ステレオに悩まされ

高杉 千歩

大概うるさいと思うたギターを弾かなくなつたと思うたら、やれやれ今度は、時も考えずに、ステレオのかけ通し、昔なら一喝出来たが、今時はそうもならぬ、此頃の若者の勝手気儘な生活をうつつし得た句。

家族麻雀カモにもなつて和を保つ

河野 君子

下五の「和を保つ」で、この句が世に出ました。核家族にならぬように、夜遊びに行かぬように、麻雀で若い者の機嫌をとる親達の御苦労が偲ばれます。

三カ日煮しめの梯子してまわり

荒木 鶴翠

正月三カ日は何処へ行っても、お祝儀として、おせち料理を出される。煮しめの梯子とは、仲々面白いです。

落着いて歩いてみても年の暮

増田 めぐみ

凍てついた道を、せかせかと歩くのが歳末のこと、さればとて落着いて歩いてみて、矢っ張り年の暮だったという見つけどころ。

ペランダで恵方拝んで寝正月

斉藤 三十四

一九七一年の恵方詣でだと感心した。私は最初から寝正月だったけれど。

炎えてなお女仮面はずさない

宮西 弥生

新しい句だと言うて、青臭い言葉許りを、

セロテープでつなぎ合わさなくとも、こんな上手に、女性を言い現わせます。

ぶらんこを揺って素直さとりもどし

鈴木 朋子

作者自身でしょうか、その子供さんでしょうか、どちらにしても、気分転換をうまく、ぶらんこを揺って、元の素直さに戻した情景です。

正月の晴着で白い杖を持ち

堀口 欣一

一読、ドキリとした句。白い杖は言わずとも盲人。年頃の娘さんの綺麗な晴着姿。見えない本人も、見せられない親達の心を察した時に暗然たるものがあります。

忘年会の通知女房に間引かれる

真山 国彦

間引かれるが仲々面白い。

★
▼次号から浜田久米雄氏（岡山参事）が執筆されます。定評のある名文と、卓越の選眼はその柳歴と相まって、本誌に光彩を放っていただけです。書きなれた原稿用紙へ編集部も大きな期待をもっております。

(不)

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四五年十月号
至 四六年一月号

路郎賞候補作品

北川 春巢

大文字酔醒めるよりはかなしや
せせらぎが耳についてと旅の愚痴
この俺を信じてつなぐ小さい手
亡妻に会いに行く日の髪を刈り
知らん間に二十二年も夫婦なり
大輪を咲かせ隣人よろこばせ
診て貰うにもやれアイシヤドウツリッワ草 右
ひとり旅細道なれど夢があり
五百羅漢代表さんに供えとく
濡れ衣を着たまま神を信じ切り

薰風 庸佑
次章 旅風
与呂志 トク子
奈良子 春巳
里風

若本 多久志

圭井堂

大文字酔醒めるよりはかなしや
キリギリス婚殿しよって軽う跳び
漬物の茄子の色よき夕の膳
石に腰据えて貧乏考える
狂人もせて地球は回転し
秋風を尼僧の胸で受けとめる
うしろ指さされぬ暮し胸をはり
結ばれた枝のみくじも春を待つ
ふり向かぬ人見送って秋に佇つ
煩惱は裂けし柘榴に極まれり
石仏話してみたい心澄み

川村 好郎

薰風 不水 綾女 甲吉 千梢 春巳 陽子 柳子 美代 美房 双楽

後悔と焦りをつなぎ明日を組む
沈痛に焼香してる債権者
結ばれた枝のみくじも春を待つ
さかさまの世へさかさまで歩けない
だまされても妻の割烹着は白

命というものありて人踊る
濡れ衣を着せられ茶漬に音がない
ゴム紐の最期プツンと言っただけ
靴べらは妻の手にあり妥協癖
ウーマン・リップ男も産めと云えそう

西尾

葉

凡九郎 里風 通児 小松園 一三夫
水客 阿茶 美房 柳子 可住
緑之助 みのる 一三夫 克枝 醉々 芳仙

沈痛に焼香しては憤懣者
お向いもしごかれてはいる日曜日
敬一

菊沢 小松園

生活にひびかぬ嘘は聞き流し
不死身めくサボテンにして水に負け
銀婚すぎた以心伝心
いっそ朱に混れば柔な掌を見つめ
口銭を不勞所得のように言い
金持ちが相手で困るのし袋
割勘が来るとは知らぬ低姿勢
人生のいま生きてはいる美しさ
転ぶことさえも女と云う不便
暮れの街どう曲つても十二月

正本 水客

失保でももろてと夏を辞めてゆく
昼と夜の境を一際蟬しぐれ
日御崎にて
灯台の夕陽神話を抱きよせる
誤字なんぼ直されても気が付かず
台風下電気けなげに点いており
日本の空に酸素が切れかかり
敬老会一番立派な服でゆく
胃手術
麻酔より醒めて必ず夜なりけり
石段のくぼみを登る寺は秋
お向いのホームは冬の日が当り

パチンコ屋虫干ししたい男たち
一葉また一葉たしかに地へ還える
太茂津
白汀

川柳塔賞候補作品

戸田 古方

倅せとぶつかりそんな人の群
売れ残りトマトはみんな青くなり
切り花にされて蕾のまま終り
セールの口見てたらしゃべり止め
知恵うすき子に生きる道教えられ
教会の鐘を合図に不良寄る
園児らの声に翼があるらしい
逃がすまいとする欲だけまだ残り
足もとを視つめ私が恐くなり
冬来ると信じてスキー並べられ

大坂 形水

雑踏に暮しの違う話聞く
謀ごとあるのか鯉が集って
足もとを視つめ私が恐くなり
イメージチェンジしてもネガはそのままに
意地を追う夫の靴を光らせる
赤飯もたかず佳き日をよそで酔い

橋高 薫風

柳友逝く日巷に人は満ち溢れ
俺の靴俺がみがいて旅に出る
人恋し飲めぬ男の落花生
カクテルは甘く心に距離を持ち
コンベアに乗る一足の朝の靴
過疎かなしワサビは老いの手で守り
玄関の小さき靴に留守の寂
ボンヤリとわたしにだけの秋みつつけ
手折りても咲く菊なるに帰らぬ師
階段を降りて心の底に着き



★
本年度の路郎賞と川柳塔賞の中間発表をす
ることになったが、本誌四冊から十句ほど抜
くのだからたいへんなことだとおもう。「選
者がテストされているようだ」とは各選考委
員諸氏の述懐である。
『秀句鑑賞』の場合は、選者が受け持ちの
号だけ活字にするわけだが、二賞ではそれぞ
れ担当部門があって、同人吟では六つの頭脳
によって選出される。
選者にも個性があって興味は深い。(不)

川柳「難波別院由来記」

戸 田 古 方

本年七月、わが師路郎先生の七回忌法要並びに記念句会を催すことになっている難波別院は大阪発展とは深いゆかりを持っているが、この別院の由来には川柳人なら誰でも共鳴できる人間ドラマが秘められている。

業ならば再建もせん三建もせん

先ず物語りを織りなす人々の御披露から、親鸞：覚如：蓮如—実如—円如—証如—顕如

—教如（真宗大谷派〔東本願寺派〕）

—准如（浄土真宗本願寺派〔西本願寺派〕）

親鸞没後、覚如によって大谷本願中心に伝統の基礎が草創され、その後、衰勢にあったのを、不出世の英王蓮如が立派に中興の実を挙げられた。一四七九年、山科に本願寺を再建し、外、内ともに備わった教権を確立されたが、身を持つことは極めて厳しく、「内に信心を貯え、外は王法を以って本とせよ」と門徒を誡めて、戦国の禍中に陥ることなく、周囲の圧迫に抗うことなく、焼かれようが、

壊されようがと、文字通り霊界に君臨していた。蓮如はその晩年、一四九九年、大坂石山に一字を造られるが、それが近代大坂の基となるのである。

煩惱がその紐一つ絶ち切れず

蓮如の後、子、実如を経て、実如の孫証如が十歳で跡を継ぐのだが、その頃の本願寺の組織は封建大名さながら、それを取巻く数知れぬ門徒大衆。時は戦国。信長の覇業を阻止せんとする諸雄にとって、この大勢力を利用せず見逃す筈がない。戦乱の禍中にいつの間にか没入して、山科の本寺は兵火に焼失。逃れて証如は本拠を大阪に移し、石山本願寺となるに及んで、愈々蓮如の心配した最悪が訪れることになる。時に一五三二年。

その若さ身を粉にしても報すべし

諸雄に先駆けて京都に入ることのできた好運な信長は、天下統一の邪魔をすると叡山を焼き、証如の子顕如の時に石山に迫る。石山

色紙短冊
書画用品

大坂戎がしる

丹 青 堂

せうやくしん

合戦はかくて、一五七〇年から一五八〇年まで満十年間戦われたのである。本願寺に組するものは、武田、上杉、朝倉、浅井、松永、三好、それから旧勢力の細川と西国の毛利。西に大阪湾、北に淀川、東に大和川を持つ石山の地は、後の豊臣家の大坂城が天下に誇れる難攻不落の儉であった如く、この時も上手な戦術指導の下に勇戦を繰返えして、その守りは堅い上にも堅かった。生けらば念仏申すべし、死なば浄土に生れなん、不惜身命、南無阿弥陀仏の旗を翻えして、寄せ手を跳ね返し続けたのである。その上、城外遠く加賀、越前、伊勢長島の門徒が諸雄と結んで誠

路郎忌川柳大会の

兼題「投句締切迫る!!」

七月一日日本社着便まで

に雄大な戦略を展開して、信長を翻奔。しかし、信玄、謙信相次いで死し、朝倉、浅井は信長に亡され、三好、松永の畿内の徒は頼むに足らず、毛利また信長の中国攻めに逢うている。加賀、越前、長島の門徒も年を重ねるうちに各個に撃ち破られて、流石の戦略も寸断されてしまつては、講和の勅諭を拒むことができない。一五八〇年、遂に紀州鷲ノ森への退出となる。最後まで本願寺の戦力となつたのはその鷲ノ森を中心とする紀州雑賀の門徒であった。講和を快しとしない寺方の人達は、顕如の子で当時二十三歳の教如を擁して、なお一戦に及ぼうとする。

かくして、教如は父に従わず、城中に留るが、半年を経ずして、教如も鷲ノ森に退かざるを得なくなる。信長はその後も二年ほど、本願寺の息の根を止める心算か鷲ノ森や雑賀を攻めに攻め、本願寺側も、最後には防ぎ切れぬほど、追い詰められるのだが、信長が本願寺に弑せられて、僅かに虎口を逃れるを得た。正に卍巴の業火といふべきであらう。

執念の梵鐘だったかも知れず

本願寺はその後、泉州貝塚を経て、大坂天満に居ること七年、秀吉の合力によって、京都七条堀川に本寺を持つことになる。その完成後間もなく、一五九二年顕如寂して、長子教如が嗣ぐのだが、石山退去の時以来の父子の不和と、顕如の室如春尼の妻子准如を溺愛して後嗣にしたいという懇願と、これは顕如の遺志でもあったのだが、そのことが秀吉に認められて、教如はその職を追われねばならなかった。教如は本寺を出て、一五九四年、大阪天満に(道修町一丁目ともいう)大谷本願寺を創設する。その時の梵鐘が現存し「大谷本願寺」の銘が鐘面に読まれる。

この「大谷」は覚如の草創した大谷本願の「大谷」であり、親鸞祖廟の地「大谷」を名乗らずにいられなかつた教如の複雑な心境が察せられる。現在の難波の地に移つたのは町の重整のためで、その二年後のこと。その堂宇が建ち上ろうとしていた同じ年、家康の援助で、京都七条烏丸に本寺が造られ、大谷本願寺とした。家康にしてみれば、将来禍根を残すかも知れない本願寺を訳も無く両断できたとはいわれている。これより本願寺は東西に分れ、大谷本願寺は真宗大谷派本願寺となり、この難波の御堂がその別院となつたのである。東西とは本寺の位置から来た俗称である。

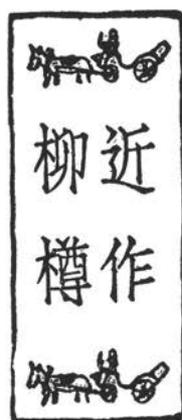
この南御堂、難波別院は、京都七条堀川に

既にあった本願寺の別院として、同じ頃建てられた北御堂、津村別院と共に、大阪繁栄の心の寄り処となった。大阪商人はその活動の場、船場に登え立つこの両御堂の豊を仰ぎ、手には算盤、手首に珠数、口に念仏。有難い勿体ないを心に秘めて、売手も買手も有難うと顧客第一。薄利多売。利は本にあり、諸事節約して、その繁昌をもたらし、天下の台所としての使命を果たした。しかも、この御堂の創設者教如が、人間ドラマの主役として僧ではあるが、喜怒哀楽に泣く人間、一人の凡夫であったことに親しみを感ずるとともに、如何にも穿ちの穿ちに囲まれているように思えてならないのである。

高級洋菓子



堺市役所前 TEL 21-2334
 北野田支店 TEL 36-4215
 中モズダイ TEL 59-3811
 エ支店 (内線338)



川村好郎選

東大阪市 宮西弥生

見栄すてて生きる女のみだれ髪
春風の誘惑鍵までかけ忘れ

愛に背をむけし女にある波紋

もう一度逢いたき人あり地平線

三面鏡迷わず逢いに行けと云う

竹原市 楠貞子

人間のみにくさ賽銭迷ってる

出世には遠く妥協が堂に入り

ほう帯の位置は気にせぬミニをはき

ライバルを妻が賞めてる苦い酒

いたわりの言葉が皮肉にも聞え

大阪市 河原林比呂路

切手にまで菊の紋章ありし頃

毒なもの程好きな胃袋にも困り

息白く玉砂利踏めば初春の音

割勘にこだわり胃袋酷使する

銀行はつまみ食いせな損のよう

大阪市 小谷葉子

筋書きになかった曲で踊らされ

美しい波紋残して悪女です

幕おりて記憶を駆ける人生か

妖怪を黙認してる都会の灯

夏帯に胸の炎をたたみ込む

松原市 守屋万竿

コンピューターあっさり浪人すると告げ

試験場胸のおふだにそっと触れ

合格の通知が寄附をつれてくる

入学金カラーテレビの夢を消し

羽咋市 三宅ろ亭

早春を猫求愛の声で知り

二時間も待ったが五分で治療済み

忘却の彼方へ四十年おいて辞め
晴着きた向いへ女席取らず

河内長野市 小川 耕人

やさしいパパうるさいママと子の評価

別居した妻も附添う子のベッド

念願の新居に犬も駆け廻る

あの誤解遺言状に消えぬまま

愛媛県 小笠原 仲美

懸命に生きても寡婦は噂され

枯れた菊くにの母病む便り来る

子が育ち安定の座に寡婦柱う

親の眼に無邪気近所はもてあまし

大阪市 西本 保夫

妻と居る楽しさ週休二日制

平社員の子勉強してくれず

課長とは同じ事云うても平社員

転籍のナゾ掛けられた平社員

島根県 錦織 文子

酸素まで銀座に売れる社会相

胃も肺も染めて都会の隅に生き

この指に夢をかけましょエメラルド

帰らぬ子へ愛のうずきが未だ果てず

鳥取市 藤本 和宏

酒たばこ飲みたし長寿は保ちたし

一周忌もうかじられぬ亡父のすね

忙がしい母でセールス寄せつけず

おだてにはのらぬと母の目が笑い

今治市 渡辺 南奉

心まで雪が入り込む朝を出る

豆灰を数え春待つ妻と子と

パチンコが込んで労働者が不足

覇気のない三十九味とも言われ

八尾市 高杉 千歩

又一つ心配ふえる免許証

子の試験はじまる寒さ朝となり

春めきし一瞬の空ビルの窓

シクラメンの窓辺白髪ぬきましよう

岸和田市 福浦 勝晴

人生のたそがれ白髪競べ合い

口笛のリズムで登るなるい坂

春風がトイレの窓からこんにちわ

京都市 山本 峠

都心にも夕焼けがあり詩がある

上を見るから眼の奥が痛くなる

ノートあけると反省の字が喋る

新潟県 高野 不二

転勤のしばらくやる気出ただけ
相談欄わが身に似ててうろたえる

大根の値まで政治のせいにされ

竹原市 三宅不朽

隙間風しきりと夢をかきたてる

酔えば頼もしき男貧しくいる

明暗の暗をのがれし乗り遅れ

守口市 岸本豊平次

世もにがり星もにごった路地に生き

代交り以来賀状だけの義理

紅一点見目麗しくされて坐し

大阪市 阪上十止庵

豊作禍の案山子にも似し父長寿

年上のひげ目つけこむ化粧品

学歴がやっぱりほしい回り道

広島県 南条露声

退職金もう銀行が見逃がさず

振り返るだけが取得の三十年

身内とて無き故里を夢にみる

大洲市 堀内眺風

弱点に触れられまいと低姿勢

同じ夢二度見て少し気にかかり

例えばの話全く僕のこと

尼崎市 中谷利美

写真では借家と見えぬ門構え

セールスが密議を凝らす喫茶店

先見の明死んでから讃えられ

鳥取市 山形春海

母さんが足してパートの娘の晴着

花の町老後もはりを失わず

土地ブーム売って先祖に借りが出来

八代市 船本史朗

むき出しの手摺りが寒い通用路

起案者の汗は知らないめくら判

せめて人の痛さがわかる子にたく

和歌山市 増田めぐみ

郵便箱又のぞいてるこの私

柏手にひとときだけの安らぎを

心のブレーキがきかない自問の夜

竹原市 生信笑子

美しき誤解只今恋愛中

存在の価値感バナナくさりかけ

青春の涙きらきら光る

岡山県 武元柳子

東京の娘に会いに行く餅をつく

一徹と呼ばれて夫の冬籠る

雪深く民話のこして過疎の村

富田林市 木村 弥栄子

ふり返り通らぬ道へ悔残す

ときめきをかくしてさりげない会話

絶頂にいてつづくもの恐れ

米子市 増田 竹馬

大学を出てコンピューターに飼育され

物欲にあらず余生の宮仕え

愚に徹すことを覚えて老楽し

八尾市 飯田 一治

七色の化粧を顔に叩きつけ

つまずいた石の裏にも春の彩

無表情に男の罨を機智で抜け

松原市 玉置 迷朗

妻の留守娘いっばしの口を利き

家買うたばかりに風呂まで洗わされ

旅に出てひつこいカゼをみやげにし

守口市 樋口 一峯

老人会まだ続いてる過去の花

蛮勇を見たり三島のエゴイズム

遥照山保養センター
展望を遮る化学の火と煙

島根県 東原 福子

ささやかな自由あり女城守る

何気ない仕草に愛が満ち溢れ

虹を抱く雫となって土に消え

和歌山市 樫村 ふみよ

食べさせて着せて正月主婦多忙

帰省子へサーピス父さん少し妬き

鬼は外内にも角を出す一人

宿毛市 山本 窓花

松の内桜ちらほら咲く手形

出る季節忘れず喘息暴れ出し

いたずらな孫で頭の下りずめ

貝塚市 行天 千代

福引で当たったザルで踊らされ

二つ三つお年上らし席ゆずる

村捨てる娘を止める言葉見当らず

和歌山市 垂井 千寿子

平凡な希望あたため今日も主婦

ストーブを磨く日課で朝となり

脊かれた日も何気なく化粧する

島根県 安達 小茶坊

おさえてた訛りが母で出た電話

大正の子の服明治の父が着る
下積にいる正直の目がきれい

鳥取市 藤 本 佳 女

保障金仏もめてるとは知らず
黙秘などするから余計疑がわれ

亡き夫にそっくり成長した背広
成長の子等へ我が家が縮み出し

姫路市 大 原 葉 香

人間の弱さが借りる気を起こし

今治市 大 本 バ ッ ト

トンネルが一人の旅をくらくする
生きている証抛公害身に感じ

出稼ぎの先で養子にはいり込み

東大阪市 齋 藤 三 十 四

老碌と他人が言うと腹を立て

おでん鍋汚れておでんらしい味

今治市 古 野 伶 人

地下街でバツタリサーさんに困り
定年の捨扶持年金の余生
羽曳野市 麻 野 幽 立

下戸の舌酒の甘さに騙される

駅前に住んで町名忘れてた

女房の声遅かりしパンが焦げ

今治市 原 田 輝 親

禿げていぬだけ白髪染総入齒

粉雪が舞ってますよと起こされる

里帰りしたままウンもスウも無し

今治市 原 田 輝 親

これ以上詫びても無駄とふてくされ

無理矢理に貴方好みにさせたがり

鳥取県 鈴 木 村 颯 子

神官に添うて太鼓も打つ内助

小さな焚火お前もひとりごと

鳥取県 両 川 洋 々

保障金仏もめてるとは知らず

黙秘などするから余計疑がわれ

トンネルが一人の旅をくらくする

生きている証抛公害身に感じ

地下街でバツタリサーさんに困り

定年の捨扶持年金の余生

羽曳野市 麻 野 幽 立

隙間風怒れる今日を煽るごと

過去ばかり語り明日のない男

ご無沙汰が荷物になった里帰り

セールの話へ〇・五を掛け

東大阪市 落 合 思 月

折り合いが付いたか二階唄になり

ゆずられた座席年をふりかえり

村みちも曲げるお金の裏表

すみません言えないけれど言わせた

兵庫県 高 橋 近 江

もう帰るのかとネオンの灯が語り

退職のついでに手術も済しとき

岡山県 山 田 止 水

もう帰るのかとネオンの灯が語り

退職のついでに手術も済しとき

岡山県 山 田 止 水

岡山県 山 田 止 水

島根県 榎原 秀子

感情のちぎれ繕う時を待つ

闘病の過去が育てた耐えること
ふるさとの夕陽こころに輪血する

バリユウムの流れ禁酒を命じさせ

大阪府 岡本 まさひろ

大東市 荒木 鶴翠

磨かれて磨かれてリングゴ売れのこり

意見したが親の十七子は知らず
とりようで便りないのが無事便り

ぶらんこに乗る鍵っ子の背に夕陽

藤井寺市 古 結 百 水

寝屋川市 福 富 隆 子

叱ってもほめても帰りはおそい子等

うとうなった眼ながらに読む悪書
妻の座の安住に馴れ又倦んで

定退はしてもひげだけそりつづけ

大阪市 堀 口 欣 一

小松市 村 井 城 南

美人と云う噂反感持った声

薄化粧しておばはんの靴磨き
百年の不作の顔がいやになり

戴いた荷物が邪魔な満員車

岡山県 武 内 雅 堂

松江市 村 松 醉 歩

残業の父はくらしのネジを巻き

道連れになり人妻の声若し
細帯の女がしめる湯の煙り

働き蜂ですビタミンの力借る

鳥取市 有 田 鹿 子

大阪市 藤 田 頂 留 子

干満の湖にも似た客の足

冷寒へ病夫気づかい寝つかれず
牡丹雪野菜の値上げも知らず降り

カメラには風景ばかり一人旅

大阪市 平 井 露 芳

大阪市 柳 原 静 香

聞えぬが心に残る歌がある

相方のはげも漫才ネタのうち
乳液びん逆さに一滴までしぼり

孫が去に明るい笑いもついて去に

島根県 中 島 英 子

羽曳野市 大 峠 可 動

初場所をこたつで力む肩のこり

豪雪がスイッチバックを手こずらせ

和歌山県 ぶきあげ虎城

空耳となる騒音噂だけ聞え

アポロ征く寒満月は笑み給い

鳥取県 林 露 杖

成人の背広が似合う子を見上げ

借りものの策で交渉抄らず

愛知県 青 山 久 春

虫歯にはならぬと義歯負けて居ず

子の素直それで心配また増える

大和郡山市 森 田 カズエ

労ってやりたい脚に灸据える

へそくりも大切と嫁ぐ娘におしえ

守口市 野 呂 杜 月

寒行の団扇太鼓がはじく雪

愛らしい御雛様にもある序列

千葉県 鳥 飼 義 久

本名を扶養しているペンネーム

心まで写されそうなレントゲン

泉佐野市 大 工 静 子

吉日に仲人として鬻をのせ

姉かぶりオカチメンコのカバーする

島根県 大 森 孝 華

キラキラと宝石はめて何願う

動かない友の決意に動かされ

鳥取市 藤 本 鎮 也

低音でじわりじわりと来る叱言

長寿法僕に教えた父は逝き

鳥取市 藤 本 恵 子

此の旗も日本の旗かと聞く軍旗

母さんを忙しくさせるいい天気

仙台市 川 村 映 輝

経済生長貧乏人は困るだけ

定期異動目前にして風邪をひき

八尾市 高 杉 力

青春を描くパレットに色がない

仮面を脱いだらピエロが生まれてた

今治市 伊 藤 一 郎

会社から家までレール有る如し

連れ帰り度い顔聳の産見舞

今治市 今 井 松 花

客の愚痴上手に聞くも腕の内

後添いの身には生みたし育てたし

高知市 竹 崎 寛

四十の坂転げ落ちてるだけのこと
四十の坂とんぼ返りはもうきかず

大阪市 花田繁子

従順の美德へちよっぴり悔が出る
物価高やりくり上手の手が上がり

大阪市 本間満津子

老いて子に従う愚痴を聴いてやり
親良人子に従うて養老院

大阪市 木村濁水

福豆を数えただけでいやになり
うかうかと暮して馬令はや七十

大阪市 岡部シゲ

三従の訓えに生きるうちの妻
老いてまだ子に従えぬ気の強さ

島根県 安達潮音

喪に服し妻と浪音聞く炬燵
亡父へ

どのあたり歩いて居るやらふた七日

七尾市 松高秀峰

断絶が自分にも起き策がなし
うつぶんを晴らす頃合いの石を蹴り

河内長野市 森本黒天子

仲直りしても童心の真似できず

河内長野市 井上喜醉

抜け出してみせませすわたしとの戦

竹原市 簗田浄美

黒潮の色守り抜く浦に住み

新宮市 小山峻

新雪に新雪が降り春遠し

鳥取市 近藤秋星

片思い鏡にそっと告げてみる

和歌山市 島本亜矢子

赤札へ今酊の中に妻

新宮市 大矢十郎

株よりはカラーテレビを持って嫁き

今治市 真山国彦

反戦へ号令調の声も飛び

堺市 栗本藤持

長生きはほめられながら嫌られる

大阪市 鈴木生仏

新年の決意が凍る大寒波

岡山県 本倉英峰

幸福の暮しの中に鉢もいる

大阪市 松岡進

大阪市 広 畑 賛 平
成人式娘ふだん着のままで行く

大阪市 多 田 富 士
縦の物横にもせずに年の暮

大阪市 今 井 隼 人
一本さげ吉例ですと里の親

大阪市 村 島 秀 村
キューピーが笑顔くずさず売れのこり

大阪市 藤 本 ま さ み
サイレンが夢でなかった救急車

松江市 西 田 溥 子
若い氣にまだ耳鳴りが止まらない

グリーン車が土産に化ける出張費

路郎先生の七回忌川柳大会当日は句を受けつけませんから、七月一日までに本社へご送付ください。選者諸先生には、大会当日に入選句を発表していただくだけで、ご選句はお願いしないことになっております

小西無鬼氏(篠山参事)のお弟子さん達の骨折りで「ささやま」誌二百号記念句会を県立丹波文化会館で三月十四日開催盛会だった。なお無鬼氏は本年も老人大学の趣味講座を担当される。

不二田一三夫氏は新聞西新聞へ「ぶれー読本」を三月十五日から六日間連載。四月十五日の早朝松江着、十八日夜帰阪の予定をされている。

麻生路郎七回忌川柳大会

日 時 昭和46年7月11日(日) 午後1時開場

会 場 御堂会館(南御堂)

— 電話二五一・五八二〇番
大阪市東区北久太郎町四一六八
(地下鉄本町駅南出口から南へ二百米)

司 会 西 尾 栗
開会の辞 若 本 多久志
挨拶 中 島 生々庵
同 麻 生 霞 乃

講 演 堀 口 塊 人

兼 題 と 選 者

「麻」 福 永 清 造
「生」 増 井 不 二 也
「路」 三 条 東 洋 樹
「幸」 岡 橋 宣 介
「七」 近 江 砂 人
「塔」 中 島 生 々 庵

(各題三句以内・席題はありません)

★ご投句は七月一日着便まで。

閉会の辞 川 村 好 郎
会 費 三 百 円。(記念品贈呈)
懇 会 千 円。会場内食堂で懇親宴。

主 催 川 柳 塔 社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇

柴田午朗著

句集「瘦せた虹」評

橋 高 薫 風

昔の武将はものあわれを知った。八幡太郎義家がそうであったし、平忠度や敦盛もそうだし、まだいくらかも例を挙げるに事欠かない。この度、発行された柴田午朗著の第二句集、「瘦せた虹」には、その武将のもつ、ものあわれに通ずるものが横溢している。

大将の句だから、句柄も大きくて浩然としている。武将の句だから、睥睨しているが、必して見くだしてはいない。ものあわれに裏うちされているからあたたかだ。

相元紋太を最後に、かつての巨星がこの世からすべて姿を消した現柳壇では、著者は一人の新しい巨星と云える。その著者が、自序でこうしている。

「自分の句を読みながら感ずることは、私の作品はいわゆる番傘川柳以外の何物でもないということである。昭和初年学生時代から番傘同人の席に居る私であるから、それは当然のことであり、何の不思議もないが、いつたい現代の川柳はこれでよいのかどうか、謙虚に反省してみる必要があると思ふ。」と、続いて、「お隣の俳句の世界を覗いてみると、その作品に理論に、われわれの世界とは

比較にならぬ大波に揺れ動いている。まさに壮絶という外ない。ではいつたい現代川柳はどうあるべきか。それはなかなかむずかしい問題で、たゆまぬ作句の努力と研究なくしては、容易に結論の出せる筈のものではない。私は現在番傘近詠の選を担当しているが、少しでも番傘川柳前進の目的に近づぐために、若干の努力を試みている。然しこれはなかなか困難な仕事で、自分の力不足を嘆くばかりである。」と。この新しい巨星の意図を、後輩は極力推進しなければならぬ。大将の意欲を兵卒の意欲としてこそ川柳界の進展が望めるのだ。

国敗けてパス美しくなつてゆく
夫ふれねば妻も忘れた顔をする
春寒し白菜の球真二つに
妻老いて飯真つ白にたきあがり
録音の街にマスクの人多き
人語解す蛇を探してひねもす春
混迷を抜け出んと裂く鮎の腹
わが胸に鶴は音なく来てとまる
美しければ裏切りも易すからん
餌を漁る鳥良心が冷えてゆく
句はこのように、個人の業と社会の業の多様の濃淡が、高い格調で、約五百句に盛り込まれたのである。作家はおおむね、初心時代に接した句風にいつまでも影響され易いものだから、初心時代にこういう句集を再読頑味して、その良さを究めるべくつとめておくことだ。

殊に、これから川柳を始めようとする人達

は、少くとも、柴田午朗のこの域から出発することだ。

著者は、最近四人目の東洋樹賞を受賞されたが、いよいよ壮健で、著者自らのいう、「番傘川柳以外の何物でもない句」から、「一路郎、水府、三太郎、紋太の域」を出た、新しい時代の川柳の確立に、卒先力を尽くして戴きたい。巻末の一句は、パイオニア柴田午朗にとって甚だ象徴的ではある。

わが胸を水増す川に貫かれ

☆ 小谷葉子さん（本社）の伯父上、小谷秀一氏が「愛のしがらみ」という自伝ふうの書を発刊。元旧制中学校の校長だけに、文字づかいなどに教育者らしい心組みがみえる好著。定価四五〇円。A5版三四三P

▼久家代仕男氏（平田市）は、食糧行政や生産調査の基礎資料など多忙だが、句だけは休まないとのこと。

▼石原青電力氏（東京都）は、よみうり時事川柳（東京都）の選輪誌に「大法」になったこと

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミン[®]A

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ
☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。

タケダ

99

▼久家代仕男氏（平田市）は、食糧行政や生産調査の基礎資料など多忙だが、句だけは休まないとのこと。

川柳五十三次 (七)

富士野鞍馬

7 平塚

平塚は藤沢から三里半(一三・八キロ)、宿へ入る前に馬入川を渡し舟で渡るので、「膝栗毛」に、

「此内はやくも馬入のわたしにつく、北八ここは何といふ川と人にとひしに、

川の名を問へばわたしとばかりにて入が馬入の人のあいさつ」

とある。

平塚は、海辺ぞいの平原で、遠くに高麗山をのぞみ、はるかに富士山が見え、昔はこの辺を唐土(もろこし)が原と呼ばれたのである。

広重の絵には、近くの右の方に大山が描かれてある。この大山は、雨降山ともいい、頂上の石尊大権現へ、江戸の若い衆が多く参詣

して、大きな木太刀を奉納するのであった。毎年六月二十八日が山開きで、盂蘭盆の前後には、盆山といつて登山する者が多かった。水の無い月に雨降る山は明き

江戸からは夕立にする雨降山 矢正(二九五)

雨降山くもった身では登られず 株木(九三八)

盆山は駆落らしい人ばかり 安能(二二一)

盆山に一筆たのむてんば下女 (初24)

と川柳狂句に詠まれ、たいてい江戸を夕刻出立して夜道をした。この駆落は、盆節季の支

払いができないので逃げ出したことをいうのである。また、

十四日拔身をしようて夜道する(一八一)

木刀の図抜け親分持つて居る (二五七)
大山へどうか仕合に参るやう

石尊は土場から直ぐに思ひ立ち (五三三)
奉納の木刀には、身長より大きいのもあった。

た。

8 大磯

大磯は平塚から二十六丁(二・八キロ)。この辺の海岸が昔の「こゆるぎの磯」で「万葉集」に、

こゆるぎの磯たちならし磯菜つむ
めざしぬらすな沖にをれ波
とうたわれている。

またこのあたりは鴨立沢ともよばれ、西行法師がここを通り、

心なき身にもあはれは知られけり
鴨立つ沢の秋の夕暮

と詠んだことは、広く世に知られ、川柳もそれ、

西行の歌で沢の名世にひろし
花房(八〇六)

冬ならば鴨立沢とよむところ 木賀(九三三)

西へ行爲鴨立の額を書き 山吹(二七八)

立つ沢を心なき身はすぐ通り 佃(七三三)
鴨立つた跡に淋しき塚も立 麴丸(七八〇)
立つ沢を心なき身の馬士に聞き 菅裡(六七三)

心なく見れば名に立つ沢もなし

山石(二〇六八)

などと詠まれ、いつころからか、鴨立沢は小磯の別の地名として呼ばれ、西行庵もこの辺に立っている。

小磯の町はずれに小橋という所があり、その右の方に、俗に「化け地藏」といわれた地藏があった。化けて人をたぶらかしたので切られたという刀痕があったそうで、

大磯に弓箭筋の地藏あり

(初四)

と川柳に詠まれている。弓箭筋は剣難の相手である。

ここは海岸で一筋道であるので、

大磯は欠落するにわるい所

(初五)

カケオチは、今いう恋愛道行ではなく、借金などに困った結果、逃げ落ちることである豊国の大磯の絵には、虎御前の姿と虎が石も描かれてある。「名所記」に、

「宿(しゆく)かはら。虎が石とて丸き石

あり、好き男あぐればあがり、色好みの石なりと旅人はあざむきかたる。」

とあり、また浄る「北海道虎石」には、

「さるにてもこの石の他の人の手に重く、

祐成の手に軽きはいかに……」
と作られ、この虎が石は、虎御前の化石といわれて、美男が持てば軽く、そうでない男が持てば重いという俗説になっていた。川柳に

石でさへ人見知りする虎が石(金十首)

少長に持たせて見たい虎が石(宝)

があり、少長は、二世中村七三郎の俳号で、好評の二枚目俳優であり、よく曾我十郎を演じたので、虎が石を持たせたら軽くあがるであらうというのである。

虎が石もろこし原の近所なり

風松(二〇一四)

孝貞に和漢二つの虎ケ石

山笑(六〇二)

と昔中国李広の伝説と虎御前とを詠んでいる

虎御前は大磯の遊女で、曾我十郎祐成の情人であったので

十郎は度々虎の皮をはぎ

一徳(四〇四)

祐成は時々虎の皮をはぎ

清原(八六三)

祐成は虎のなき声きいた人

春風(八〇八)

兄弟は相模女にくらひこみ

(三十四拾六)

虎坊としこなしてよぶ鶴の丸

(二二七)

などと川柳に詠まれている。

歌舞伎十八番の「矢の根」に、馬の背に大根をつけた馬士が出て来て、曾我五郎はその馬を奪って跨り、大根を鞭にして「曲馬のほどをこれ見よ」と引込むのであるが、それを

大磯として、

大磯の馬子はせいせいおくれ来て

(拾六)

大磯へ馬子はせいせい追ってくる

(四三)

大磯でやうやう馬を取りかへし

久鳥(二三)

大磯へどろぼどろぼと馬士は来る

(四二)

時致は鞭をかちつて息をつき(拾五八)
と川柳に作られてある。

☆

▼斎藤大雄氏(札幌市)の柳文集『雪やなぎ』が発刊された。各方面へ執筆した柳文集だが、読みごたえのある力作がB5版二五四ページにぎっしりつまる。発行所、札幌市北二十一条東三丁目札幌川柳社。定価六百元。

「明治日本の思い出」

定価 九八〇円

右は日本スキーの父として仰がれているテオドルフォンレヒの手記を五カ年余の歳月を費し、医学博士・中野理氏が原著から忠実に且つ絶妙な日本語に翻訳されたものである。スキー愛好者は勿論、スキーに関心のない方でも外人の眼に映じた当時の日本観として興味つきぬ名著であると確信する。一本を是非座右におすすすめする。川柳塔編集部でとりつぎします。

「現代南画の描き方」

定価 二千円

川柳塔社創刊号から毎月表紙に麗筆を賜わっております、直原玉青画伯このたび標記の著書を発刊されました。これは先年ご発刊になり大好評を博された「新しい南画と俳画の描き方」の姉妹版でありまして南画に志すものにとつて欠く事の出来な、双翼であります。ご希望の方は本社編集部でお取り次ぎ致しますので振つてお申込みおすすすめ致します。(生々庵)

第18回大萬川柳大会 春は大萬川柳から

昭和46年2月21日 会場 大萬

川柳界の春は大萬川柳から、このキャッチ・フレーズを使っても久しい。司会から柳話、閉会のことばまで川柳塔首脳部総動員というのも大萬川柳大会の特色でもある。

開会の辞の多久志氏は台湾へ旅行中、選者の千代さんが欠席で阿茶女史が代選のほか、三林坊、素身郎、扇水恵二郎諸選者(岡山組)は揃って出席、ここにも大萬川柳の「らし

さ」がある。
生々庵主幹が大萬川柳を柳話の中で激励されてるとき、梅里氏未亡人は会場の隅で目頭を押さえ、令息克巳氏夫人は階段のかけで感無量の涙を拭いておられた。

毎年おなじようなことを書くが、好郎氏を慕う「どんぐり」や「あすなる」の面々が大笑して応援に駆けつけるあたり柳界美談といってもいいだろう。六十余名の句の花が咲き競い、その興奮がそのまま夜の選者招待懇親宴に移れば、川柳塔座スターの隠し芸大会の幕あきだ。

兼題「大笑い」
呵々大笑置いて恭仇めが去る
河内天笑選
恵二朗

あんまりの下手へ満場どつと湧き
はつたりが見事にあたり大笑い
ひと桁を間違っていた大笑い
千代
千万子

兼題「顧客」
青森に顧客先ありりんご箱
ヒステリーの顧客へハンサムやってくる
正本水客選
梨

両替に來た常連を大事がり
常連へ黙ってさよりの造り置く
阿茶
扇水
兼題「代表」
御代表儀礼ばかりの香をくべ
代表は赤坂辺で丸められ
代表をアホに行かせる春団治
山川阿茶選
三林坊
一三夫

兼題「好評」
好評とうらはら歌手の私生活
好評に應えてという独り言
好評におぼれる人と燃える人
好評を得たというも独り者
橋高薫風選
利美
水客
弘朗

兼題「素通り」
植木鉢持って素通りの顔になる
素通りを律義に詫びたハガキ来る
素通りへ偶然らしい戸が開き
内祝を送っておいで素通りし
山本素郎選
水客
柳宏子
つき子

兼題「三枚目」
三枚目の芸は指先まで笑い
三枚目愛のゆくえをつなぐだけ
三枚目あすの喜劇の色を撰る
白井三林坊選
可住
素郎
時

三枚目余技でも食える腕もち
兼題「遊ぶ」
鍵ツ子がボスになつて子遊び
高杉鬼遊選
弥生

備前川柳社廿五周年
久米雄句碑除幕式記念

吉永町文化川柳大会

日時 四月二十五日(日) 十時から

会場 浜田久米雄宅で除幕式、十一時から吉永町中央公民館で大会に移る。十五時半閉会予定

柳話 中島生々庵 川柳塔主幹

兼題 西尾 梨 川柳塔社

赤飯 大森風來子選 川柳岡山社

両手 丸山弓削平選 弓削川柳社

脂(あぶら) 石原伯峰選 広島川柳社

骨 横山一声選 備前川柳社

席題 三題当日発表兼席題共各二句

賞品 兼席題共三才呈賞 出席優先

記念品 出席者全員に呈す

会費 三百円 昼食を呈す

投句 句箋(4×18センチ)に一句ずつ記入表面に雅号明記、四月二十日まで

に会費百円(二十円切手五枚)同封して備前川柳社(〒七〇九一〇二岡山県和気郡吉永町福溝)あて送付のこと。発表誌後送。
主催 備前川柳社 後援 吉永町



近 詠

今はやる服か知らぬがピエロめき
 破産したシャツター無気味さをほらみ
 両方の名簿に載って浮動票
 世間の目恐れて不合理と妥協

小松市 山上千太郎

運をつかみ損ね活字から消える
 二次会というても屋台の灯で足りる
 植木の芽いとしむ平穩さにひたる

今治市 長野文庫

遊び辭つて東京から戻り
 公園の遊びが変るボタン雪
 生真面目な男が遊ぶ地図を持つ

醉々
 草春

兼題「刺身」

野田素身郎選

飛入りへ刺身一切れずつ減らし
 煮え切らぬ男刺身へ手を付けず
 飲み足らぬ刺身ひと切れ残しして

好郎
 三林坊
 素郎

席題「扇」

谷井扇水選

母達者扇のかなめとして坐る
 別荘の庭師扇で指図され

水客
 三林坊
 三林坊

席題「朗報」

本田恵二朗選

生きていた生きていたよと湧き返る
 はすかいに田圃を走るよい報らせ

素郎
 朝二
 静歩

同次元に

高鷲 亜鈍

朗報へ泣いて笑うて酔いつぶれ

同次元に置かねばならぬ詩川柳
 禁酒禁煙銭がないから
 のど元すぎれば熱さ忘れてる庶民
 ええ御趣味とお隣さんからほめられる
 俺でも利用できたら利用せよ若い君
 女房の父とまぢがう総白髪
 老人の感傷理づめを棄てた
 ブツブツ言うな五体そろっているくせに
 吾も人他人も人なりいじめるな
 黒星が説教されて半句なし

ショッピング・ゾーン

梅田 一番地

とにののす
 グらしくまで
 ピンらつきまで
 楽しいショッピング
 いこいを皆貨
 百

大阪梅田・水端定体
 阪神
 電(06)345-1201代

激怒して超現実主義にかえり
 篝火へ身を投げかけん蛾と化して
 闇に探るは甘くて熱い朱唇を
 大正の女は鎮守の森で鈴鳴らす
 くじけるものか火箭の的になつてやる
 ぼくは葉笛はぼくが昔にこだまする
 ぼくだって世界鶴呑に成れる酒
 ぼくの昔はぼく一人討つて出るにもぼく一人
 老母逝くラスニエフに罪はなし
 当にしたら人はなんにも云ってこず
 天井の低さへ老母の目はうつろ
 書留で思いがけない人から為替
 画筆を折って林檎を噛む
 踊る阿呆に見る阿呆それを観ている占師
 くらやみでエゴの張れないアンブレラ
 砂漠であると海原であると光の所在もかめん

おのゝこんちゃん

本多柳志

◇先頃札幌市で開かれた冬期スポーツ大会の開会式当日の出来ごとである。皇太子殿下が馴れないスケートをやらせて、スッテンコロリと尻もちをつかれた。その写真が新聞に大きくのったのである。が併しこの写真を新聞に出すことについては、一部の人達から異論が出たらしいが、ありのままを見せることの方が皇室と国民との親しみを、より以上増すことになるとの意見の方が多かった結果だといふのである。戦後二十五年の今日こんな馬鹿げた話を、聞くのさえ恥かしいくらいなものである。

◇大分以前の話であるが、陛下にお見せする阿波踊りの一踊るアホーに見るアホー云々

の文句を削除して変えて踊って見せたというのを聞いた。まさか紋付やフロックコートで踊ったのでもなかるうが、いまだにこんな石頭が国の中に残っていたとは、正に驚き桃の木である。こんなその場限りのごまかしやうそを平気でやるような連中だからこそ、税金や公費までごまかす手合いが出てくるのである。あるものをそのまま正直にお見せすることが、陛下への最高の礼儀でありお見せすることである。時には陛下や皇太子にも「見るアホー」になって戴いてもよかるうじやないか。

◇所でわれわれの作句にも選者目当てやその場限りの、ごまかしやうそがないだろうか。川柳にはつねに詩がなければならぬ。うそやごまかしのない自分を向の中に表現しなければならぬ。人間の真実をうたい上げるため、風刺や皮肉を表現する言葉や文字の美しさにおぼれてしまつては、ともすれば真実から遠のいてしまう危険がある。何もむつかしい文字や美しい言葉を使う必要はない。なるべく平易な言葉でありのままの真実を、自分の作法でうたい上げる所にこそ、人に判って貰える、共感を呼ぶ作句があると思う。

★ 立話しおこんにやくから汁がもれ 豆 秋
補聴器で近所のうわさ聞き歩き 柳 志

▼尼緑之助氏（出雲市参事）から一三夫宛に「薫風氏の編集長、大いに期待しています。三月三日に末娘が結婚、何となく親の苦労と時間を使いました。いつも〃〃〃の編集もお流れて落ちつきを失ったような春です。松江でお会い出来る日を楽しみに。」

入社

垂井葵水選

入社報返事に母は嫁のこと
社のバッジつけて今日も胸を張り
入社心得スカート丈けに触れても
公害の会社へ入社する引け目
教え子の会社へ守衛として入社
新入社コネでないのが母自慢
入社してオレは二枚目だと思
新入社ツラの厚さも期待され
コネを背に新入社員の風当り
将来はライバルとなる新入社
保証人などはいらない社に入り
新入社学生服がよく似合い
前借はスキーがほしい新入社
入社とすぐマージャンが役に立ち
入社して原価を知ったアホらしさ
新入社電話のベルへ手がひるみ
入社して知る学歴の有難さ
入社した僕より母が嬉しそ
入社して気付かぬ癖を指摘され
新調の背広おどおどする入社
入社式の時社長を見たっ切り
入社の日それもズボン寝押しする
門衛も笑顔で迎える初入社
入社日の朝のネクタイ決まらない

入社して理屈通らぬことも知り
歩留りも計算ずみの入社式
皆偉らく見えて入社日の長さ
みんないい人に見えてた新入社
どうにでも染める入社顔並らび
靴光る入社一日目の鼓動
入社した当座守衛が智恵をつけ
新入社しきりとどの乾き知る
入社式明日に眠れぬ長い夜
大金業ひとり背負う気の入社
入社して井戸の底から空を見る
入社した日から斜めの陽が当る

十客

定年を追い出すように新入社
初入社なじめぬ椅子へ浅く掛け
ひと目惚れ入社の日から影になり
入社して恋愛感も少し変え
始めての出動化粧薄くする
入社した田舎訛りはよく動き
自信ない顔で入社祝辞きく
新入社女同士は黙ってる
入社してみればさほどでない会社
入社した日から視線を集めた娘

人

社是一カ所ひっかかったまま入社
ついてふとんねたまし子の入社
地

入社した頃の箸箱まだ使い
軸

入社するビルを母さん見て帰えり

露声

康月
杜南
城住
可住
新之助
里風
魚山
富子
耕人
止水
峠

どんたく
英子
初甫
木魚
喜枝
喜醉
代仕男
カズエ
七面山
杜月
古方
古方
ふみよ
露声

本気

川口弘生選

本気かと念を押されてドキッとし
しようも本気にこたに奴さん本気やが
笑われて本気でなかつた事にする
本気ともとれる言葉で気をもたせ
金借りに来たに本気にしてくれず
たよりない本気故郷へまた戻り
本気にさせと電話もかけてこず
病みつつも生きたい心は本気なり
五十過ぎて本気で再婚考える
本気かと聞いて返事はしてくれず
本気かも知れずさらりと受け流し
だまされた振りも本気取りあわず
出鱈目が多いで本気にして呉れず
本気にははしないと凶クジ気になり
ノド元を過ぎて本気に笑い出し
本気には出来ぬ心のわだかまり
好きですと本気で云えるのも若さ
本気にした若さを今もいとおしく
年下の本気へ素直になれぬ恋
智恵の輪へ大人本気になつてくる
剣を振る孫の本気にわく茶の間
泣き出した方は本気で掛けて来
作文に書いてしまった子の本気
本気にして子供のよを言いふらし

隆子
奇童
バット
孝華
富明
ふみよ
和宏
代仕男
千翁
古心
双染
綾女
竹馬
露杖
藤持
素身郎
露声
一郎
白汀
春日
不日

本気ではないが妻をこきおろし
おとなしい妻が本気で妬いてすね
奥さんが本気にせぬで無事に済み
妻だけが本気で心配してくれる
母本気油断するなと目で合図
今度こそ本気と云えば母弱し
勤のよい母で本気にしてくれず

佳

孫にまた負けておじいちゃん本気
本気にするからと女房は話さない
本気になればなどと定年まだ思い
本気にはせぬ老婆にしてしま
好きですと本気で云えぬ年になり

人

これ以上本気になれぬ妻がいる
聞こうちに本気で妬いかに気付
昭和元禄本気で腹切りした男
本気ではなかつた筈の恋に泣き

軸

酔 客

福田丁路選

二次会で紅一点が酔いつぶれ
酔客を捌く女将の片笑窪 同

酔客をタクシー呼んで追い払い
酔客の財布の紐はかたかつた
奥さんの酌に酔客かしまり
酔客に馴れて課長の妻らしく
酔客の扱い母が起き来て来る
独り言いうて酔客靴を穿き
ネエさんと云われ酔客引受ける
指切りをして酔客を喜ばせ
酔客をかえす手段に骨が折れ
酔客の愚痴を微笑で聞いてやり
酔客を手玉に夜の街に生き
酔客へ無駄な料理が運ばれる
欠伸噛み殺し酔客持て余し
礼云うていの積りらし客の酔い
やけ酒をホステス一緒に飲んで
酔客へ電気掃除器立てて見る
酔客がわめく北方領土論
酔客が上司で下戸は持て余し
酔客が夫婦の仲に水を差し
水飲んで酔客素直に立ち上がり
閉店が近く酔客眠り出し
酔客に何やら悩みある素振り
我が家のように酔客上がり込み
酔客に車掌も楽でない仕事
酔客に酒好きのパパ想い出し
集会に来て酔客の素顔見る
酔客を取り巻くチップ狙う顔
金の無い時だけ寄って酔うお客
飲み直しとドカドカ踏み込まれ
酔客を扱うコツも娘に教え

佳

孝 華
どなた
軒太楼
十止庵
同
宵 月
古 方
近 江
英 子
春 海
春 日
代 仕 男
同
百 水
止 水
保 夫
迷 朗
同
一 治
秀 峰
佳 童
奇 女
可 住
松 花
伶 人
和 宏
木 魚
城 南
白 汀

酔客の気前のよさが気にかかり
手離しの酔客になれる連れがいる
酔客とと扱われるのが気に召さず
酔客にからまれ児には泣き出され
酔客へある日は母になるマダム
夫婦して酔わせた客をうるさがり
酔つてない時に来てねと追い出
里心つけ酔客帰らせる 肖二
悪酔の世話も焼かせてノーチップ

投句にゼヒノ

川柳塔柳箋

一冊六五円・送料三五円

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400 八

初歩教室

— 題「從」 —

本田 惠二 朗



從軍の名残りの髭にかかる霜
從順の文字辞書から消えかかり
從容と鯉はまたたき一つせす

杜 月 同 同

好調だ。このペースで歩き続けよう。題が從
と出たら、一応辞書をひもといて、從に關係
の語を沢山ひろい出してみるのだ。
類語を知っただけでもプラスになる。

誓 二

服従を余儀なくされた阿呆らしさ
惚れた弱味從者の如く扱われ
面白い句材だが、表現が固いと効果が薄れる
(惚れたが弱味ですまるで從者です)

同 童

從横にあべれさせて疲れ待ち
(從横にあべれさせとけ疲れるぞ)

春 海

二歩後に從う婦徳妻もまた
(二歩後に從う妻にある婦徳)

秋 女

從いて行く覚悟の祝詞挙げられる
(永い道從いて行きます三三九度)

類 次

弘法を杖に從いて遍路ゆく
(弘法に從いて行きます遍路笠)

類 次

二人暮し大だけ從順さを守り
亭主以上に稼ぎ從順さを忘れ

同 同

赤帽代りにさき從いてくショッピング
赤帽代りと言わなくても、赤帽だけでよい。

同 同

(赤帽にされて從いてくショッピング)

ライオンを鞭と餌とが猫にさせ
(ライオンを鞭と餌とで猫にする)

孜 孝

從何位日に狂奔の世を嘆き
(從三位さま日日狂奔の世を嘆き)

近 江

追従はもうこの辺で無駄と知り
今月の五句は、揃ってよく出来たよ。

露 杖

追従も媚びも通じぬような顔
子は親に妻は夫に從わず

同 同

忍従も皺に刻まれ母米寿
(忍従を皺に刻んで母米寿)

同 同

もとの用いようで句の趣きが違ってくる。
この場合、私なら忍従ということ強調した

文 子

表現に生きる為め、をとしたいよ。
地味に生きる夫に從い三十年

同 同

この一句は頂けるよ。あとは説明に過ぎない
よ。もっと練らねばならぬ。頑張れ。

慶 彦

解つたら黙って俺に從いて来い
かと言つて無条件では從えず

同 同

ずばずば言つたな。大いに使つてよい手だ。
從順に育てて頼りなさばやき

万 宇

從と順り主となり女幾山河
出来た、出来た、拍手を送ろう。

同 同

彼となら從いまする二世かけて
とらえた句境を、三日三晩考え抜け。

八 郎

(彼になら從いて行きますあの世まで)
これでは都々逸の文句みたいだな。もつと練

り直していると、こんな句になつてくるよ。

(從いて行く彼の歩巾のたのもしく)

師に從うはなつかし言葉となり
(師に從うそんな言葉があつたつけ)

藤 持

從いていてもへそくりだけは貯め
(へそくりを貯め貯めちゃんと從いてくる)

迷 朗

について来いハイで来ました五十年
(ハイハイと從いて来ました五十年)

千 夏

ウーマンリブ從順さ忘れ棚に上げ
(從順さどこへ置いたかウーマンリブ)

同 同

ハイハイと從順な妻で家なごみ
(從順な妻がなごます茶の間の灯)

同 同

或る時は主その時は從の夫婦仲
(夫婦仲とときに主であり從であり)

同 同

從順な犬もよし悪し吠えせず
吠えるという字句を使えば、犬という字句は

同 同

出したくない。反対に犬という字句を使えば
吠えると言いたくない私である。

同 同

(吠えること忘れた從順良し悪し)
(番犬にもならぬ從順良し悪し)

同 同

七十の子に從えぬ口達者
(七十の子に從えぬほど達者)

同 同

從えば春には葉がつき花がつき
(從えば春には芽吹き花が咲き)

同 同

從わぬ振りして妻は側に居り
(從わぬ振りで寄り添う妻である)

同 同

損徳が絡んで淡々從いて行き
從來の社風を若さが吹き飛ばし

同 同

五句ともよろし、精進の成果と思つ。
從業員仕事嫌いはストがすき

同 同

(從業は嫌いストへはご精勤)
生 仏

従いて従いて四十年勤め 三十四

嫁して夫に従いが今恐妻といわれ 同

浪曲の節でやれそうだな。ものは相談だが、

(従順三年そろそろ恐妻の気配見せ)

(従順三年そろそろメッキがはげかかり)

これ位のところでいいことにしようよ。

従業員株は愛社名を押しつける 保夫

(愛社心という名を押しつける)

三従をまず蹴飛ばしたウーマンリブ

まさひろ

(ウーマンリブ三従なんておかしくて)

一列従隊声なき救助隊 新之助

(一列従隊救助へ声もなく進む)

意中にあるのか首従にはふらず 静子

(成算があるのか従にふらぬ首)

従軍記者砲弾くぐって度胸だめし 濁水

(従軍記者の度胸が生きた記事にする)

上役に服従努力出世の夢 富士

(出世への夢あり上司に従いて行く)

器量より従順な娘が気に入られ 比呂路

(器量より従順買われたご良縁)

三従の訓えに生きた古い女 シゲ

(三従の訓えに生きた顔の皺)

長幼の序明治言葉とはきずてる 志津

(従順なんて明治言葉と吐き捨てる)

従のもの横にもしないような女房 進

(従のものたまには横にします妻)

新大臣従者にきやお国入り 賛平

(従者ぞろぞろ新大臣のお国入り)

従順の美德ちよつぱり悔いられる 繁子

従業員不足マネキンがお出迎え 同

(従業員不足マネキンに迎えさせ)

主従とは親子に似たる間柄 秀村

(親子とも見えるほど主従むつまじい)

老いて子に従う愚痴を聞いてやり 満津子

忍従に慣れて何にもへこたれず 同

大洲市 米沢 曉明

おふくろの味に欠かせぬ井戸の水

よく見ると女 旗ふるヘルメット

貫禄はこんなに違うクラス会

今治市 月原 宵明

孝行も金でするのはよく目立ち

課長より万年平の方が蓄め

どたん場が来れば女が指図する

和歌山市 秋月 宏方

公害に遠く落葉を踏む匂い

日向ぼこ色気もうない顔ばかり

ふるさとはいいな釣鐘なるお寺

岐阜市 市川 鱈魚

食うだけの意地なら犬も持ち合わせ

とことんの話補聴器向き直り

人様のもうけかぞえて暇な奴

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

折り合わぬ商談もみ手を硬ばらせ

善人をせめる言葉が見当らず

疑ぐりを秘め硬ばっているお世辞

卑屈に置きかえて劣等感満たし

一応出来たよ。この調子を忘れないで。
あちこちに従業員募集あり 隼人
(従業員の募集合戦火花散る)
保母さんに従って園児のはしゃぐ列 肖二
保母さんとはしゃぐ列とを並べたら、園児と
いう文字は不要だよ。
(保母さんに従って行く列のびちぢみ)
大好きと知って捨犬従いて来る 綾女
こう言いたいであろうし、これが本当のこと
なんだが、川柳人は其の反対を言うて笑わせ
ることがある。
(犬嫌い知らず捨犬従いてゆき)
こうなると、どんな結果が起るか、ご想像に
まかせとけばよい。
題——右——四月二十日締切(六月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二 〇七七一
本 田 恵二朗

「引き継ぎ」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 六百八十六句
入選 九十三句

長い客妻に引き継ぎ飯にする

引き継ぎは四角四面に始められ

鳥取佳女
子や孫に引き継ぎさせたくも弱視
栄転の引き継ぎ何も彼も話し
先代のレールの上をただ走る

先代の人徳までは引き継げず

引き継いだ地盤に残る七光り

真沙子

引き継いだバトンの汗を握りしめ

貝塚つき子

引き継ぎも終って仰ぐ雲の峯

江

引き継ぎの心にもない握手する

水

引き継ぎが前よりデカイ穴をあけ

奇

引き継ぎの荒療法に社連賭け

野迷路

減しませず殖やませずに子へ譲り

素郎

銀行が入り引き継ぎ手間が入り

柳子

大阪 新之助

引き継ぎが形ばかりで事故となり

鬼 焼

引き継ぎの課長が少し厳しすぎ

枝

引き継いで来た左遷地の空が澄み

朗

引き継いでくれる養子に賭ける夢

太楼

引き継ぎを終えた安堵と孤独感

籠

退院が引き継いでゆく鳥の籠

水

こだわりを捨て引き継ぐ肚が出来

茶

ライバルへ引き継ぎ左遷の旅へ出る

佑

引き継ぎがすつもりへ長男出るとい

夫

引き継ぎの専務知らぬで押し通し

水

引き継ぎもせんに息子一升酒

酒

定退の引き継ぎくどいが聞こや

水

気軽うに重い引き継ぎあたえられ

朗

引き継いだバトン重みふとよるけ

日

若本多久志著

「親なる・子心」

実費 二〇〇円

送料 六五円

「老いの坂」

実費 四五〇円

送料 七〇円

不正があるから引き継ぎとがらず

枝

引き継いだ子には不服な七光り

生

引き継いだメモに前任の温かさ

郎

この引き継ぎ釈白柳も冥すべし

声

引き継ぎの現金一円まで教え

々

引き継ぎを信じて過疎の田を守り

丘

引き継いでゆくとび老舗味が落ち

雄

十年をたった三日で引き継がれ

笑

引き継ぎ意地で歩とニューモッド

天

引き継ぎがペコペコと電話口

二

頼りないけど引き継ぎをおだてとく

平

親族代表養子に不自由だけ継がせ
店継いでいます貧乏しています

高槻 静馬

引き継いだ社長おやじの監視付
引き継ぎ上司の気苦勞やつと知り

倉敷 筒子

引き継いだ自信が少し揺ぐ椅子
引き継がす肚の罵声だち耐え

倉敷 三林坊

銀行が引き継いでから立ち直り
引き継ぎを済ませ赤坂神楽坂

大阪 文秋

人気まで継げない未熟さえあせり
親よりもケチで安心して譲り

大阪 柳志

非常線引継ぐホシのモンタージュ
家は子に芸は他人に引き継がれ

大阪 一栄

引き継ぎが無いま手伝い嫁くと
バトンタッチし帰る夜道の星

愛媛 みのり

引き継いだ息子へ父の死が重い
引き継いだ椅子へ前任者の噂

八尾 酔々

女湯へバトンタッチのボク三つ
引き継ぎも済み定年の貌となる

倉敷 翁童

ゴマスリのコツも引き継ぎし
思わくは外れライバルへ引き継が

倉敷 素身郎

引き継いだ当座は様子見るつもり

脱税のコツも一緒に引き継がれ
抜擢で引き継ぐ方は有頂天

堺 圭井堂

引き継いで喪の兄嫁も当てがわれ
引き継ぎのうちに二号が這入り込み

東大阪 生長

金力で引き継ぐ地位にある野心
労組が引き継ぎ管理する社運

初出馬亡父の地盤がある強み

岡山 七面山

役得のことも小声で引き継がれ
引き継ぎは部下に任せて茶をすり

大臣の引き継ぎ握手だけで済み

富田林 花梢

妥協なき引き継ぎ椅子のきしむ音
引き継ぎの自信噂の中にいる

在りし日のままで引き継ぐ市長室

引き継ぎは家柄だけという落ち目
佳句

堺 天笑

引き継ぎの当座は盲判押さず
引き継ぐ子も緻なれど錆びさせず

下関 木石

襲名の披露を膝で寝てしま
引き継いでライバル意識父へ持ち

愛媛 みのり

引き継ぎの走者にきび坂が待ち
人ノ句

富田林 花梢

とり巻きの野心に引き継ぎ踊ら
地ノ句

今治 宵明

引継いで最後の紫煙廻り椅子
天ノ句

大阪 水客

父の血が近道をゆく人にせず
選者吟

心安うなれば貸付引き継がれ

四十六年度ベストテン
(三月現在)

一 どんたく

二 花梢

三 文秋

四 千代

五 里風

六 圭井堂

七 木石

八 真沙子

九 水客

一〇 ゆきを

一一 つき子

一二 天笑

一三 扇水

一四 瑞枝

一五 恵二朗

一六 静馬

一七 宵明

一八 みのり

一九 鬼焼

二〇 三島

二一 代世
二二 吸江
三五 藤井寺
以下 略

昭和四十六年度第五回

「朝食」五句以内

締切 四月二十日

第六回 「次の間」五句以内

締切 五月二十日

投句先

大阪市南区鯉谷仲之町二〇

郵便番号 五四二

川柳塔社大萬川柳係

み んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック



積水化学
本社 大阪市北区宗室町1

川柳家の暦

(四月生まれの人)

遺稿 清水白柳

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった労作である。十二月分まで、ノリに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表作という意味ではない。
(編集部)

1日	岸南柳 M21 戊子	大阪	7日	水谷谷水 T6 丁巳	岡山	12日	永井行平 S2 丁卯	岡山
	人生に因縁という言葉業			二号さんも犬も秋田の産の由			生活の名人だった母を褒め	
1日	竹村桂風 M28 乙未	高知	8日	高見緑風 T7 戊午	京都	13日	直江武骨 M32 己亥	小樽
	足跡を残そう砂のある限り			背のびし虹の長さを子が告げる			金屏風今日は酔ってはならぬ酒	
1日	本田惠二朗 M40 丁未	児島	9日	住夢遊 M29 丙申	堺	13日	浜辺南奉 S15 庚辰	今治
	人生がそらつ始まった呷々の声			疑心抱くおんなひとりが遠く座し			貧しさに負けまい白い割烹着	
1日	山根白星 T12 癸亥	東京	9日	山下清祿 M38 乙巳	伊丹	14日	中川黎明庵 M33 庚子	伊勢
	云い過ぎは俺にもあった茶を啜る			富士晴れて祖国の緑つつがなし			紅つけず荒いくらしの足をなげ	
3日	宮井勇次 T2 癸丑	和歌山	9日	川口弘生 T14 乙丑	大阪	15日	野本昭四 M37 甲辰	東京
	なすびなど植えてパケツも終りなり			神杉の偉大千年の雪に耐え			ほめられた後ろ姿も君のもの	
3日	小松亮 T15 丙寅	高知	11日	河西登美江 M24 辛卯	山梨	15日	大森よしえ T7 戊午	岡山
	飲めぬ酒無理につがしてみたい夜			初対面多弁の妻へ眼が動き			目の中の像は誰にも犯かされず	
4日	市川寛延 M41 戊申	東京	11日	松本羅春 T10 辛酉	高知	15日	岡村久志良 M40 丁未	岡山
	女なる悲しみおんな酌をする			よくよくのこと下戸ひとりを酒を飲む			タブーには触れずに父と子の将棋	
4日	西村梨里 T14 乙丑	大阪	11日	細呂木魯木 T5 丙辰	石川	16日	越智伽藍 M35 壬寅	対馬
	貧乏神何時まで俺を苦しめる			老眼を探せば孫のおもちゃ箱			大金庫開けて会計朝のお茶	
6日	隠岐不醉 M36 癸卯	姫路	11日	中川淳子 T11 壬戌	和歌山	16日	西山寛子 S4 己巳	岡山
	水たまり新郎妻に甘えられ			つなぐ手を離し他人の顔をする			風呂敷を結び女に意地があり	
6日	浜田儀一 M40 丁未	大阪	12日	高杉鬼遊 T9 庚申	八尾	17日	清水米花 M33 庚子	埼玉
	未亡人一度落ちれば流に似て			父ありき通天閣といづもやと			台所でまだ生きている妻の下駄	
			12日	吉原紅月 T15 丙寅	岡山	17日	水越幸路楼 M36 癸卯	金沢
				美しい言葉で他人の子を叱り			雪の夜を何かささやく桜炭	
			17日	谷川渥子 T9 庚申	岡山	17日	西沢青二 M42 己酉	京都
				距離のある話へフルーツ皿の白			ひとつところたしかめられて呷々の声	
			19日	新川博也 T11 壬戌	高石	19日	浜野阿水 T6 丁巳	神戸
				働けるうちは子にいう事もなし				

抱負など崩されてゆく街の音	21日 岡崎 姫百合 S7 壬申 岡山	25日 大阪を大阪にする法善寺
20日 岡橋 宣介 M30 丁酉 大阪	21日 夫の留守やっぱり小さくなって寝る	25日 松 沢 敏 行 T12 癸亥 市川
20日 鈴木 可香 M37 甲辰 名古屋	21日 夫の留守やっぱり小さくなって寝る	26日 岩 本 雀 踊 子 M43 庚戌 桜井
その智慧がぬめから凡夫面白く	21日 夫の留守やっぱり小さくなって寝る	六人が稼ぐ明日の米を磨ぐ
20日 瀬戸 海州 S5 庚午 高知	22日 中島 鬼水 T9 庚申 富山	26日 福 島 郁 三 T5 丙辰 西宮
蛩声を張り童心にかえる宵	22日 雪深しむくると果つる身を運び	波風を今ふり返るとき夫婦
21日 三条 東洋樹 M39 丙午 神戸	22日 久米 奈良子 S2 丁卯 東大阪	27日 七尾 十面子 M43 庚戌 高知
恋愛至上凡夫に松は蔭をかす	23日 雲走る恋の逃げゆくさまに似て	あいにくの雨で散歩の予定かえ
21日 西野 生 長 M34 辛丑 東大阪	23日 長谷川 鮮 山 M35 壬寅 名古屋	28日 三 浦 秋 無 草 M38 己巳 松山
21日 福 島 鉄 児 M41 戊申 門真	23日 断りの返事へ子供立てるなり	日曜日明るい部屋だなどと思
家裁から出て人生をやり直し	23日 横 山 三 星 子 M42 己酉 東京	28日 柴 田 午 朗 M39 丙午 島根
21日 今 津 浪 子 M42 己酉 高知	23日 百姓をいたわることばみな活字	夕陽は赤くともおもうこと一つ
過ぎたこと云うなと友へ酌いでやり	24日 今 野 空 白 T12 癸亥 仙台	28日 北 川 春 巢 T2 癸丑 大阪
21日 飯 田 一 治 M45 壬子 大阪	24日 増 井 汀 柳 M36 癸卯 大阪	ケープルの一番前に立つ若さ
朝刊にわが家のすき間教えられ	24日 江 國 幽 谷 M44 辛亥 岡山	29日 野 村 太 茂 津 T4 乙卯 和歌山
21日 森 井 そのみ S18 癸未 竹原	25日 鳥籠の広さを知った羽根で飛び	踏ん切りがつかず基石の艶を出し
子が待つておりこつそりと席を立ち	25日 西 村 芳 川 M44 辛亥 大阪	

川柳塔社常任理事会

三月四日午後六時から本社で常任理事会を開く。
 議題は路郎忌川柳大会と「的」刊行記念句会である。路郎忌川柳大会は大会委員長多久志氏を中心に、月を追うことに熱気がはらんでくるようである。——四月は定例日四日が日曜日なので三日が常任理事会になる。

出席—古方・静馬・好郎・形水・生々庵・万の・柳志・多久志・栞・小松園・一三夫諸氏。

▼柳界短信▲

▼「菜の花句会」が川柳塔八尾支部として二月七日に第一回開催。西尾菜副理事長を軸に八尾在住の鬼遊、酔々氏などが大わらわ活躍する。三月句会は十五日に八尾駅付近の常光寺で開催された。会報第一号に栞氏の「発会のことば」が掲載されている。

▼北原晴夫著「にげん博物館」現代川柳で描いた人間の生態—四六判上製二五六頁、価五〇〇円、〒七〇円。東京都文京区目白台一ノ八ノ三郵番一二、振替東京六四八九六泉書房。

▼東洋樹川柳賞贈呈川柳大会が四月十八日十二時開催。会場は神戸市生田区中山手通三ノ八六海洋会館。兼題—地・許す・署名・独走・虹。講演柴田午朗(受賞者) 会費三百円。

▼福島鉄児氏(門真市同人) は軽い脳軟化症で東区京橋前の町大手前病院6の六一一号室で加療中。ところ三月七日退院された。

▼南海川柳会—四月十五日、題「フエリー・ヤリ玉・中途半端。会場はナンバ高架下、親和クラブ。

▼南大阪川柳会—四月二十日(火)午後六時から、題「勝気・制服・出来心・気休め。松崎町二丁目、以和貴荘。

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼清水白柳追悼句会(主催 関西川柳作家懇話会)の句報が発行になった。白柳さん安らかに眠り下さい。

▼紋太忌句会は四月十一日(日)正午から神戸市生田区中山手通三丁目八六海洋会館で開催。兼題人間・樹

▼甘い・稼ぐ・茶の間、投句は百円封入の上四月五日までに神戸市東灘区本庄町深江栄通二の二 光森良宛。又、毎年のおふうすと本社四月句会を紋太忌句会として開催される。

▼東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は四月十八日(日)正午から神戸海洋会館で、詳細は55p。

▼豊中川柳会主催の恒例お花見句会は四月二十五日(日)午前十一時から服部緑地さぼてん公園で開催。

兼題、満腹・清水斗升選、清遊・竹岡屯坊選、健康美戸田・古方選、ニュータウン鶴飼・蟻朗選。

▼安井蜂呂・久子句集、「道頓堀」刊行記念句会は三月二十八日(日)、道頓堀河畔の大坂観光ホテル大広間で開催。発行所は、東大阪市花園西町二の二の四 定価五百円(送料共)

▼尼崎市民川柳大会は二月二十八日(日)午後一時から尼崎市立中央公民館。

▼第四回四国郵政川柳大会は二月十四日(日)阿波池田保養センターで開催。

▼川柳春秋社大阪句会は三月から公務員共済組合谷町荘に会場を変更。

で開催。
▼第二十六回中部地区川柳大会は三月十四日(日)午前十一時中日新聞社四階大ホールで開催。

▼なごや春の川柳まつりは三月二十一日(日)正午から名古屋市西区役所四階ホールで。

▼川柳北上吟社では北上年間優秀句一句を推薦、六月の岩手県川柳大会席上で表彰することになった。

▼京都新聞柳壇大会は四月二十五日(日)午後一時から京都新聞社大会議室で開催。兼題、耳・魚・人形・配達、各題三句。

▼ぼうふら誌百号突破創立十周年祝賀川柳大会は五月二日(日)午前十時から千葉県茂原市公民館で開催。兼題、紅白・上位・発展・笑くば・風向き・食いしんぼう・徹夜・欠席・勘違い

・世話、各題二句、投句は二百円同封して四月十日迄に茂原市東郷三井東庄東郷社宅四三三平井吾風宛。

▼愛知川柳作家協会第七回総会並に川柳大会は五月十日(日)午前十時、熱田神宮内竜影閣で。兼題、玉砂利・緋・フアイト・経験・雑音・青空、各題三句。

▼昭和四十六年度知事杯争奪北海道川柳大会は五月二十三日(日)正午から。兼題、大将・空想吟(若し透明人間になったら)・海賊・ウーマンリブ・笑止の至り・花より団子、各題二句、投句は二百円(発表誌希望者は三百円)同封の上、四月二十日までに旭川市十條九丁目左八号旭川川柳社宛。

の上月十日迄に浦和市常盤九の十四の六武藤かめ吉宛。

▼川柳塔八尾支部菜の花句会報第一号発行、関連記事55p。

▼かゞみ句会(岡山県)は四月二日夜池田古心居で、兼題、花の下・入学・好き・空気、五月例会は二日夜古心居で。兼題、素通り・てんてこ舞い・選挙・対策。

▼きたぐに(金沢市)三月号柳誌展望で、能村唐衣氏が川柳塔一月号を紹介しておられる。某人・静馬・多久志・生々庵諸氏の句や、鞍馬・春果・大八氏の読み物など逐一挙げ、路郎忌川柳大会に及んで親切である

▼福島紋児氏(門真市同人)は川柳紋士二月号で、「大阪便り」を、長谷川紫光氏(岡山県同人)は川柳寸劇

三題を掲載された。

▼川竹松風氏(高知市同人)は奴田原紅雨・野本未遂両氏と三月十五日香我美支部結成句会へ参加、桶内耕吉氏が支部長に選ばれた。

▼本田恵二朗氏（倉敷市同人）は二月九日児島ロータリーの卓話に招かれ、「川柳の今昔」と題してお話をされた。今年七月からライオンズクラブの会長に就任予定なので、その準備をほぼつ始めることになり忙しくなる由。賀状四百枚のうち柳友からの十三枚が抽選に当り、中々小谷葉子さんのものがあつたので、葉子さんが一ペンに大好きになつた、大万でお会いしましょうと。

新同人紹介

江	城	修	史
—	好郎・	い	わを推薦
谷	井	扇	水
—	三林坊・	好郎	推薦
吉	岡	青	香
—	好郎・	摩太郎	推薦
福	浦	勝	晴
—	柳志・	一三夫	推薦

▼若本多久志氏（西宮副理事長）は、ふらりと一人で台北へ。大万川柳大会まで帰るとのお便り！うるわしの島日本がまだ残りし。

▼越智一水氏（今治市同人）は四国郵政川柳大会の懇親会、句会、座談会が二日にわたつたので、その世話で大忙しであつた。

▼竹内翁童氏（倉敷市同人）から、「藤井春日氏が本年初頭から風邪をこじらせ、急性肝炎で療養中です。還暦を迎えられて張切つてお

られました。そんな訳で作何も小休止とのことです。」とお知らせ下さつた。速かなご快癒をお祈りします。

▼内藤きさ子さん（岸和田同人）から、「旧年十一月二十五日夕方、母が家の前の交差点で車にはねられ即死して以来、ボーッとしたり毎日です。三島由紀夫氏が割腹自殺した日で忘れられぬ嫌な一日でした。

▼小畑自有浪氏（姫路同人）は昨年末脳溢血で倒れ左半身不随とのこと。六十八才なので、半分はあきらめ、半分はもう一度何とか希望をつないでおられる。

▼三井酔夢さん（香川県同人）は二月には東京へ、三月初旬には鳥取へと受験の令息につき添つて気の重い旅を持たれた。あしあとが消えてしまつた砂丘冬。

▼水谷竹荘氏（大阪同人）は川柳高知の句評を故白柳氏のおとを引継がれた。

▼西辻竹青氏（奈良同人）の句碑除幕式を兼ねた室生寺吟行句会を五月下旬に鳥ヶ辻川柳会で催すことになつた。準備の都合上出席希望者は水谷竹荘君へ連絡のこと。

▼山田季贊氏（高槻同人）は三月九日退院。また新幹線建設工事にばく進とのこと。

▼川村好郎グループ三十余名が三月十四日宝塚へ吟行。宝塚荘ですき焼パーティや隠し芸で楽しい一日をすごされた。

▼八木千代さん（米子同人）の令息が四月に結婚、広島で新居を持たれる。おめでと。



金露

支える味
灘の味

清酒

キンロ

金露酒造株式会社

本社三月句会

会場 以和貴荘

六日 午後六時

春まだ浅い三月句会。タイトルは『的』刊行記念句会である。

会場の両側には万的氏の筆になる色紙や短冊が美しく飾られている。受けつけの机上には紫の色もあざやかに、万的・杜の共著句集『的』が高く積み上げられてあった。それが見るみるうちに低くなつていく。売れ行きも上々である。

柳話は久々ぶりの吉田圭井堂氏である。柳歴は昭和三年からのベテランだ。

若き日の食満南北先生や岸本水府先生が登場して、句会場にはキモノ姿で矢立てをとり出して句を書くという、四十数年前の話を新鮮な感覚で聴衆を説得していくあたり、正に圭井堂氏の独壇上である。

歌舞伎『忠臣蔵』を十七文字で表現した、川柳に。魅せられたのはその日からだと述べられる。会場で声あり、また類みまです。令息のおめでたで早く帰った一舟氏に天位二句というオマケがつき、生々庵主幹が月間賞杯というなごやかさで三月句会は明かるさいっぱいだった。(不)

出席 古方・水京・新之助・文秋・与呂志 (河井庸佑整理)

・双葉・柳志・迷朗・一三夫・肖二・百酒・水客・一舟・葛城・季賛・千万子・鶴声・美房・花梢・万的・綾女・柳宏子・誓二・圭井堂・杜的・瓢太・静馬・生々庵・一治・凡九郎・醉々・好郎・静久子・金三・醉升・茂美・葵水・千寿子・凡吉・形水・一二三・吸江・つき子・多久志・太茂津・トメ子・庸佑・儀一・静歩・英断・牧人・栞・小松園・鬼遊・宣介・作二郎・弥生・河産・あいき・葉子。

席題「下請け」 垂井葵水選

モデルチェンジ下請け工場をあらわす
下請けの不安を語り合うバイト
下請けの意地は素材に手を付けず
下請けに二十四時間短かすぎ
下請けへ回るたびに手を抜かれ
下請けへ回り手形にある不安
下請けの実権妻の専務持ち
独特の技術で下請の親父は泣き
マンガになつても下請の親父は泣き
下請けの一人表彰の列に立ち
下請けの上座においたしつけ糸
下請けを土産に下請の腹の中
引受けの値へ下請がそっぽを向
下請けの話し雪だるまは汚れる
下請けで三年ビルを建てていた
下請けの意地は徹夜の顔で来る
脱税が下請工場からばれる
金が無理言う下請逆らわす
親会社倒れて下請け頭上あげ
皴よせを下請け素直な顔ででき
先生の名で原稿をまかさされる

万の英断
小松園
河産
文秋
凡吉
醉々
迷朗
作二郎
柳志
百酒
儀一
作二郎
静歩
儀一
柳宏子
好郎
作二郎
柳宏子
あいき
古方
水客

席題「爪」

羽原静歩選

下請けの二月をやつと切り抜ける
下請けに支えられてる世界二位
下請けにそんなりべート教えられ

爪切りを捜して耳搔きだけが出る
退屈の足の爪など切る赤い爪
爪びきにふと立ち止まる紅格子
無為徒食バッグを下げた赤い爪
爪噛み噛み満更ではない娘の瞳
爪はじきされる予感がして別居
西陣の女の爪に見る裂け目

B G の若さも派手な爪の色
ゆつくりと爪を切るのも旅の朝
爪跡の視察形式だけのこと
爪刈つてあらぬ噂を聞き流し
マニキュアに恋秘めてありんごむく
爪を切りながら盗んでいた会話
爪切りがないかと課長閑らしい
爪みがく女過去をとうまらいぞ
ウーマンリブ叫び女の爪のびる
銀の爪ばかり磨いて暇な魔女
印刷屋親指の爪たぐまし
爪染めた親に叛いたらラス持つ
合掌の手がしらじらし赤い爪
不細工なことは爪までパパに似る
爪弾きされた上座に気が付かず
艶っぽい話になつて爪を刈る
ダイヤが泣いてる爪でも剪り給え
働かざる手に候とマニキュア
軍手から爪が見えてる釜が崎
爪を染めたらぬ政治へ爪を噛む
冬の虹もてぬおとこの爪を剪る
さびた鉄で片意地の爪を切る

小松園
形水
水
肖二
柳宏子
圭井堂
生々庵
文秋
綾女
季賛
好郎
儀一
小松園
宣介
葵水
醉々
葉子
千寿子
鬼遊
柳宏子
英断
生々庵
あいき
静馬
小松園
生々庵
古方
醉々
新之助
美房
作二郎
静歩

席題「片意地」 松川杜的選

香典の額に片意地くずれだし
 片意地な処まで似て来て歳を知り
 片意地が素直に聞いてる左り前
 知りつつもからすは白で押し通し
 片意地とほがしてくれる妻が居る
 頑として人の買わない馬に賭け
 片意地にウンと言えは済むものを
 親として女の片意地が頼もしく
 片意地な女聖書を捨てきられぬ
 じいちゃんの意地姑地笑ってしまふ
 片意地が人間国宝の名を残す
 片意地にしきたり守る村祭り
 片意地したものの片意地腹がへり
 不貞寝した男トボトボ歩く
 根性のある片意地を見込まれる
 寝返りをして片意地である自嘲
 片意地を通して微熱まだつづき
 よいところが似ず片意地が親ゆずり
 片意地という抵抗を知りながら
 片意地な肩を先輩押ししてくれ
 片意地が辞表持参で出社する
 片意地なお人だしたと母細く
 片意地な奴も交って子沢山
 片意地だから小さい義理は行届き
 会釈かえして片意地な酒に握る
 片意地を売物にしてすし振る
 片意地もよし男を主張する
 片意地と知ってか雀も来てくれず

兼題「グリーン車」 傍島静馬選

グリーン車脱線事故は皆同じ
 グリーン車で売り娘は歩巾少し詰
 グリーン車にせそエリートの三時間

河産 与呂志 鶴声 圭井堂 静馬 誓二 一三夫 作二郎 千寿子 千介 静馬 柳宏子 柳宏子 文秋 柳志 葛城 古方 水客 柳宏子 柳宏子 飄太 英断 水客 牧人 凡九郎 杜的

グリーン車の味を帰郷へ吹聴し
 グリーン車に僕まで乗せてまだ赤字
 グリーン車へ母はちいさく小さく
 グリーン車の中は冷たい目で見合い
 よそゆきの言葉で話すグリーン車
 旅費だグリーン車なみにもろて
 祝電をグリーン車で読むハネムニ
 グリーン車の窓を乗転やつと囲み
 グリーン車に乗る課長にやつとなり
 グリーン車の窓も見ても富士は富士
 イヤリング本物に見えグリーン車
 グリーン車車掌恐縮して起こし
 グリーン車車誰と同乗した自慢
 グリーン車本音をはいた車中談
 グリーン車えらいおひと乗り合わせ
 何者だといふ顔でいるグリーン車
 金策と見えぬ社長長のグリーン車
 グリーン車で指名犯人斜に構え
 千円札でお茶を呼んでるグリーン車
 グリーン車で故郷へ錦かざる旅
 金婚を子等に祝われグリーン車
 グリーン車又検札が通りぬけ
 グリーン車旅の対話のないままに
 グリーン車バックに写真だけを撮り
 グリーン車の見送り左遷とは見え
 グリーン車のないローカルにも旅情
 グリーン車と知らず派手に握り飯
 グリーン車で葉巻くゆらす一人ぼ
 慣れいもしてグリーン車落着かず
 グリーン車でも座席へあわててる
 役得の顔グリーン車の金バッジ
 グリーン車へどこかどかと農協
 グリーン車に乗るコート買わされる
 おばはんの隣になったグリーン車
 グリーン車自己満足の顔並ぶ

百風 一三夫 柳宏子 千寿子 凡九郎 杜的 一治 綾女 滋雀 多久志 千介 美房 美房 古方 庸侯 生々庵 柳志 好一郎 柳志 水客 小松園 百松園 百酒 杜的 肖二 千松園 千子子 花梢 つき子 葵水 好郎 千万子

グリーン車がピタリ赤帽のいる所
 新婚でも父娘でもなしグリーン車
 靴を持ちグリーン車では落ちつかず
 グリーン車一人はパーマダムらし
 グリーン車を降りたら元の妻の声
 緊縮に課長も乗れぬグリーン車

兼題「二人」 阿万万の選

二人して築いた城に夕陽さす
 お茶漬で済まず気楽さ二人きり
 人生の二人に道はただ一つ
 同行二人とは淋し一人遍路
 年輩の仲間二人にさせてくれ
 二人だけの話に茶房たそがれる
 春の雨二人に昨日も明日もなく
 物言わぬ二人結構それでよし
 二人だけになってキッスを盗まれる

野迷路 好持 藤一 多久志 好持 多久志 好持 柳宏子 柳志

銀杯下賜 楳元紋太

「紋太忌」披露句会

▼紋太賞 ふあうすと賞制定披露▲
 四月十一日(日) 正午開会五時終了
 神戸海洋會館(生田区中山手通三丁
 目八六電333・3128番) 国鉄元
 町駅東出口北へ二百米右側
 甘い・椽ぐ・人間・樹・茶の間(席
 題二題、各三句、締切一時三十分)
 人間紋太と紋太川柳について 諸氏
 全国句集現在までの報告言也・勢火
 人間「紋太忌」について 鈴木九葉
 紋太賞ふあうすと賞は 増井不二也
 会費 二百円

▼当日は先着50名に紋太先生の何かを贈呈

未来凶へ二人の歩巾合うてゐる
 銀婚で二人の夢が合ひ始め
 二人きり結局何もせず別れ
 二人きりキャベツ半分買うてくる
 二人してそれぞれ違う神だのみ
 二人して縁がきのはしへ二三行
 影二つ池に映して声が無い
 ポシトモニゲンキとウナで届けられ
 やつと二人になりましてひかり号
 二人のチャンスと知つて口げんか
 遍路笠ふたつの鐘が澄んでゐる
 二人には覚悟の出来ている噂
 およむじの二人の顔は吉らしい
 仲よしの二人入試も共に落ち
 ちよぼちよぼの二人停年後も続き
 二人だけの秘密を女医に見破られ
 二人して踏めば砂丘に音があり
 灯台下暮した波音が妻を離れない
 風紋をいたわる影が二つある
 披露宴すんでふたりの顔となる
 指させば用足る二人話題なし
 二人して来た相談に父も折れ
 漬物の色も話題となる二人
 他人様が二人の気持ち知つていた
 仲よしの二人だからわかる嘘
 結着の話二人だかりをする
 二人して同んじ嘘を口にする
 へんなどこ似ている二人馬が合
 どう馬が合うのか風呂にまだ二人
 いつまでもつづけ二人の手のぬくみ

兼題「レール」 戸田古方選

カーテンのレールも春のリズミカル
 一本のレールとなつて生きる寡婦
 レールを歩むかにあつた敗けいくさ

作 一 一
 二 治 柴

なんとなく頼りなさなモノレール
 電車ごつこのレールを踏き鳴ら
 伏線を張りさす古老と言うレール
 母さんの手にはレールはまだ錆びず
 涸れてゆく夫婦レールなるレール
 本線と岐れ赤字となるレール
 故里の音がきこえて来るレール
 Sカーブ軋むレールの気味悪るさ
 トネールに敷かぬレールのような俺
 死ぬためのレールを組むは男かな
 陽炎の彼方から煙吐く汽車が来る
 赤字線レールが票になつてくれ
 果てしなきレールを妻と支え合
 迂回するレールに好きな女がいる
 春がすみの中へ一本になるレール
 ゆっくりと家風のレールへ耳をあて
 レールに乗つた倒産へまっしぐら
 腹たてているのにレール滑りすぎ
 ローカル線レールへバスの砂ぼこり
 トロッコのレール大地に住みつげず
 人生のレールここからローカル線
 ハンマーでレールの命たたくれる
 七光りレールの上を走らされ
 ふるさとへ続くレールの横に住み
 子のレール巾せもうなり広くなり
 妻の手のぬくさにレール磨かれる
 廃品になつて陽の目を見たレール
 廃止したレール勿体ないほど光り
 枕木になつて鉄路の無事折る
 五十年レールうねくね友白髪
 レール平行線と思うこと馴れ
 花束も貰えずレール取り去られ
 レールは平行線やからレールです

兼題「的」 正本水客選

百発百中そんな人がなつて行け
 定義がないのだから揺れ動き
 矢が外れるのか静止のまま嘸う
 のを射て去ぬ税務署の憎らしい
 大学を遮二無二出ただから恐
 学的を射た意無子供だから恐
 白い金魚を的にしたくて弓をもつ
 人生の的ははずれて平和と定年
 目的の的は夫婦なり平和なり
 金の的は射たりされども孤独なり
 憎しみをあつめて女的がある
 人の少し違えど父のアドバイス
 人それぞれのを見つめて朝を
 煙草出す目的自供待つゆとり
 人間に的があるから前へ出る
 アジア人同士の的となる戦場
 舶来の新語を的の外れにつか
 注目の的になりすぎ左遷され
 向うから外れた的を追いつけ
 標的の白あざやかに下崩れる
 思われるが勝つては了つたのと
 思はれぬ男の眉が消えてい
 的の持たぬ男の眉が消えてい
 的の紋り兼うけて受験の日が
 射られた的だが彼氏矢を向け
 的狙う静かから動へ矢のきび
 的徐々的にまつて見が嫌き
 灯台を的にまつて波光る
 警察を非難的にしつて平和
 愛という的の私をうってほ
 的の少しづらして話を進めとき
 間違つたをキュービットが思
 的が大きすぎて真ん中に当らない
 ルレットとまわつていればた
 的をしぼれとだけ先輩の眼が

水客
 生々
 新之助
 凡九郎
 つき子
 美房
 静馬
 万馬
 静馬
 文秋
 英断
 静歩
 美房
 葵水
 吸江
 河産
 牧人
 河産
 千吉
 凡九郎
 好郎
 葵水
 美房
 凡九郎
 どんたく
 作二
 英断
 新之助
 旅風
 滋雀
 軒太
 一柴

老地物語

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

勢いに乗って居るうちはよう喋り好郎
アルミ貨が気長に拾う人を待ち酔々
おうらかに礎石の穴へ雨が降る水客
福引を引きに来た気で居る見合い柳志
勢いが余って乗車位置乱れ葵水
そんな眼で見れば穴がある世間凡九郎
クモの巣の張るまで眺めている気長滋雀
穴の底から地獄の声を聞く柳宏子
スタートの祝詞二人は聞いていず吸江
広告の喰い放題へ家族づれ金三
福引の時計に起こされねばならぬ作二郎
どうせなんぞ当る福引一番上をも古方
どぶねずみ穴から髭をちらつかせ儀一
穴埋めは親父がしたと察できき鶴声
団体の勢いよのが気をもませ智子
福引の旅行内証で行ったとこ新之助
気長く煮いて黒豆老母の味千梢
鳥の餌娘が煮にける家族連れ一二三
勢いは口先だけして妻は知り一舟
年寄りの気長に合わず嫁の知恵綾女

故郷へ尾羽打ち枯らした家族連れ
ベテランの刑事なるほど気が長く
蟻ジゴク穴に命を掛けて待ち文治
気の長い奴がチャンスをつかんでた
スタートで上下に分けた寝台車夢成
空くじの無い福引はたかが知れ双楽
渚にならぶカニの穴にも初日さしあいき
スタートの馬馬なりに知っており小松園
ひとりもの当てたブラジャー替まき水京
かくし女有るとは見えぬ家族連れ静馬
スタートで退く作戦もある勝負君子
勢いをためて相手の出方待ち章雅
スタートへ戻る不運の子をくばり一栄
家族連れで行けば無心も聞いてくれ十郎

備前川柳社

平井三与子報

お雑煮の家風が嫁に引き継がれ久米雄
真実がどたん場に来て解りわけ草二
タクシーのメーター降りる頃動き胡風
毛筆の賀状読み返し読み返し正洲
水溜り避けて歩く子逃げない子清春
ライバルに多幸を祈ると書く賀状一与子
気分だけ若い足がついて来ず三与子
二十年賀状でつなぐ細い糸芳月
結局は女の甘える声に負け浄美
金バッジ賀状の人はそり返り芳明
公害も嘘も包んだ雪景色秋月
妻の座について賀状の二三枚柳子
日だまりへ職場のニュース集められ伊久野
恋人は己れ一人の胸の中幸仙
その罪を酒にかぶせているエッチ宗郎
田舎からの餅ですという雑煮文平

こまつ柳壇

山上千太郎報

ラッシュアワー飾りボタンは今日も落も
上気した顔が出てくる満員車久子
混む中に巡査の口に光る笛草久
混む時間さけて銭湯へ身障者城
物価高政治家まかせにして云われ勝
顔きかすボスで政治屋とも云われ月
政治家の政治屋になりよく太り千路
おでん屋で代議士級の政治論弘美
政治家の舌は二枚と云う相場清子
懐ろ手どの政治家も気に入らず静古
運悪る転んだ拍子が床につきなほ江
くじ引きもしやと子供使われるまどか
おみくじの吉運ことしにかけて見る清香
交通禍不運な車に乗り合せ吉枝
がむしゃらの努力に運もついでくる佐一郎
七転び八起を生きた六十年たつ路
復員で拾った運を抱いたまま正柳子
握手してもう反則が出る仕掛け友孝
ついでに握手して返してスト解除魚山
身寄りない見舞わびしい手を握り富美子
ホステスな握手の指が演技する秀哉
特急に握手する窓がなしと樹
空港のロビームードのある握手沐人
握手をした手に盃持たされる千太郎
見送りの握手窓と歩るかされ雀踊子
式すんでもうハネムーン空をとび味平
恋愛も三三九度の手がふるえ宅案
気にかかるハエニ匹居て式長しみさ
表彰式以下同文は背広にて芳朗
式次第一言多い祝辞きく茶仙

すぐ崩れそうに政治家決意する 路也
来る春へ期するものあり松の志 弘子
ウイロー社（ハワイ） 快夢起報

責任もとらず勝手な熱を上げ 快夢起
失敗の責任いつも部下に着せ 北海
責任を持たぬ奴ほどよくしゃべり 万里歩

無責任なれば主義を楯にとり 峯円
責任を有耶無耶葉巻の煙で覆い 眺舟
死人に口なし責任をぬすりつけ 蒼蛇楼

一生涯母は責任負ひ給ひ 笑山
手をゆるめ心結んもって責任者 坪有
頼まれて先輩責任もってやり 泉水

責任の無い世の酒はうまかろう 魔花麗
責任を果した後の気の安さ あき坊
同権が責任たらいまわしにし 浮草

どたん場で責任転嫁ふところ手 浮草
責任と取りくむ意気もまた楽し 春風
塚・若芽合同句会（塚市） 吉岡青香報

肩書にあつまる猪口の下心 筑前
猪口おいて公害論に花が咲き 志子
お猪口での三々九度が立志伝 徳寿

お話をあとでと猪口をあてがわれ 天笑
心眼がひらけ己にとらわれず 敬三
孫に見せたい冬ひらく雪の花 藤持

小包をひらいて嗅いだ母の味 耕人
落下傘ひらきふんわりふんわりと 今雨
和の勝利握手する手に血が通い 静馬

年寄が折れかけて表面和をされ 金三
和解するきつかけ子供だしにされ 真紗子
和に徹しだんだん増える貸し倒れ 小松園
ある時は鬼にも見える妻である 美代

鬼も十八たとえが通る我が娘 誓二
公書へ書いてらみの効かぬ鬼瓦 一舟
鬼の字を書いたのは消しかぬ女 信天翁

言訳へ妻は鬼面をはずさない 好郎
ふだん着のままで義理はゆきとき 宏子
ふだん着が一番似合う妻でよし 千万子

ふだん着も花嫁きつちり帯を締め 狂二
ふだん着の父へねだる子甘える子 左久良
新世帯嫁はふだん着迷うてる 双楽

家族連れのかなわぬ母へ買う葉書 一二三
鍵つ子の目が追っている家族連れ 青香
指切りを大事に連休家族連れ 笑痴

どんぐり川柳会（羽曳野市）川村好郎報
濡れ衣に甘んじ帰路の月が冴え 桂馬
濡れ衣を晴らす純情さがどもり 酔々

濡れ衣を沈黙されている無気味 吐来
他人から見れば気ままな嫁きおくれ 吸江
濡れ衣の靴の重さをもじつと耐え 一治

濡れ衣は一枚だけでも肩がこり 松浦
水いらずなればこそ出る気まま 一步
気ままさが魅力となるも恋岳 太

気まま言うた人と別居のたよりなき 光影
重病の気まま何でも聞いてやり 武吉
弱くとも強い心で今日も生き 竜虎

出張出張気ままな旅がしてみたく 好郎
まるべに川柳会（大阪市）川村好郎報
大晦日電柱一羽鳥あり 扇里

振り返る弱きも知った夜の雲 節子
見合いたで希望抱いだだけのこと 幸子
年新た先祖敬う年になり 星斗
気休めと知りつつ着飾る初詣 閑子

親同士協定してのお年玉 一
豚に似た猪もおる年賀状 飄太
老い顔鏡の奥でうるわしい 寿子

ささやかな希望に生きるのが庶民 茂児
ブローチもあなた好みにする鏡 好郎
どんぐり川柳会（大阪市）川村好郎報

地下足袋のこはせがかたい 初仕事
歯痛には医師の笑顔も気に入らず 喜風
仕事始生きている倅せかみしめる 修史

親知らず抜くの歯科医空を見る 孝子
ライバルに仕事始を励まされ 河股
歯車が人間となるコップ 酒殿

初出勤帰省の顔もみな揃い 弥生
成立の数へ遅参がむかえられ 虎声
下心あって一度も遅参せず 弥生

漫才にしか生きようがない 反っ歯
酒呑みの父の歯痛の大げさな 静波
親知らず痛み青春終りけり 雄峯

金冠を入れてた女はよく笑い 比呂路
歯型だけつけてネズミがもう来ない 一治
会計を握る男に遅参され 天笑

九星は白仕事始も力入り 勝恵
煤煙が机にまできた初仕事 草春
遅参をば悔いるどころか苦言言い 鶴峯

タイムレコーダぐつととちもいる遅参 一二三
振り袖が胡蝶の如く舞う初出 一三
ちぐはぐな歯並びをして愛嬌よし いわ保

四重歯せぬルスマンも歯が立たず 痴亭
八重歯みせて何かをねだっている娘 つき子
多数決じんだ踏んで歯がゆがり 双楽
また今日も八重歯にあきもせず通い 和宏

いまでもせつない別れした遅参
口中に金冠一つふえて新春
仕事始去年のつづきの歯がうづく
和歌山短詩型文学クラブ 三幸報

噂に挑戦 爪を赤く染め 公害に負けぬ 噂を撒く男 否定せぬ 噂女に術がない 短大の娘が裏口で待つマダム ありふれた顔に整形手術する 恋人の噂他人の顔で聞き 妾宅で息を引取り又噂 童心となつてマダムとパスの中 老残に造花などにききたがり 噂又ききあきてるのにききたがり 本妻に子なし二号がある噂 聞かされたうわさうれしい顔で消し 梅咲けば噂の人を思い出し 噂から生まれた仲を添いとげる 噂にものぼらぬ女で金をため 週末の今日の噴水ひかっている 尾やひれがついて噂又戻り 常連を子供あつかいするマダム うらやましお噂などとおだてられ 大切にされすぎ母は淋しがり カットグラスもマダムの顔がゆれ 洗面所隣の噂気にかかり

好郎 薫風 小松園 太茂津 葵水 陽一 千寿子 正夫 光治 芳朗 泰子 勇次 富子 凡夫 寛一 淳子 和美 盛太郎 忠治 城石 佐知子 智恵女 昭伸 柳信 圭水 貴山 摩天郎

コンテナ船荷の積み下し簡素化し
二つ三つ唄えて名取りと云う小唄
はずれてる小唄へ三味が追っかける
潮時で女の出る幕入る幕
惚れっぽい女の業をくやしがり
女ひとりなまじ暮せる職が有り
二代目に命も財布もみな預け
たすかった命忘れて欲が出る
命張る利こうな男先に逃げ

川柳わかやま 炎水報
本心を出さぬ女のもつ炎 智子
一直線恋の炎に死をいそぎ 佐一郎
背を丸く反古を読み読み燃しおり 央生
初めての人と炎と燃えし日も 弘生
ロソクの灯が道を這う落し物 四坊
老木の芽も生き生きと艶やかに 栄
栄冠をかけて酣棋士の意地 竜
宴酣戦時知らない妓の軍歌 延伊知
宴会も酣となりマナー失せ 福松
酣の宴にそむいた泣き上戸 十郎
醋の論 戦社運曲り角 千寿子
燃えつきた炎子供供の愛に生き 陽一
オーパーを脱げと柳の芽がゆれる 智
嫌いではないが打ち解けにくい人 増蔵
エビスさん福をやるのかもうのか 大茂津
甲論乙駁論議 酣紅一点 葵水
裏に急ぐ車窓に梅のさかりにて 川柳まばたき 出原敬一報
徹夜した顔に似ているひるの月 南岳
月を踏む今日も職場の帰りの道 忠雄

双楽 虎男 幸太郎 赤天狗 朱門亭 千代 耕人 友楽 寿徳 葵水報 智子 佐一郎 央生 弘生 四坊 栄 竜 延伊知 福松 十郎 千寿子 陽一 増蔵 大茂津 葵水 出原敬一報 南岳 忠雄

火災予報しながら火事の続く月
明日を待たず稲刈る鎌に青い月
万博に人を招いた月の石
枯野照る師走の月に物思う
旅先の湯舟の窓に月ゆらぐ
神秘なる月を踏む人 拝む人
公害地故郷の月は美しい
月ばかりあかるく照らす過疎の村
十五夜の月を背負うて稲を刈る
満月に誘われて行く歌の会
寒月へ裸の梢がつきささる
内職の母名和の背を申し
憂国の同志平月の夢さまし
進学の夢語り合う親同士
空財布同士思案の歩が重い
内心で競うてうわべよき同士
ストーブが母の夜なべを温める
ストーブでするめが焼ける守衛室
待つ人の来ぬ宵桐の葉落ちる音
落葉今日驕りの過去をみせず朽
落葉焼く猫背に冬がのしかかり
ストーブをつけて裸像の踊る夜
燃えつきるまでの炎としての価値
紅葉も車窓に映えて通りすぎ
豆球の光の中 平和像 三重子
小米売り冬へのおごりに軍手買う 初美

▼「城北明朗会」と「たけはら」が次号になりました。
▼川柳大阪の奥川継之助氏が三月一日逝去されました。

本社四月句会

日時 四月七日(水) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題 柳話
「青春」 戸田古方
「手ごろ」 本多柳志選
「マンモス」 金井文秋選
「ぬれ衣」 大坂形水選

席題 三題 (題と選者は当日発表) 各題三句・厳守
川村好郎選
兼題 二句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

5月の兼題 「大アンク」 「赤界」 「限」

・ 募 集 ・

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
近作柳樽 (10句) 川村好郎 選
課題吟 (各題5句以内)

「冷凍」 木村涼人 選
「純情」 坂井三葉 選
「ブレイキ」 友淵貴山 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
近作柳樽 (10句) 川村好郎 選
課題吟 (各題5句以内)

「手さぐり」 高橋鬼焼 選
「女難」 仲どんたく 選
「青」 大森娘句楽 選

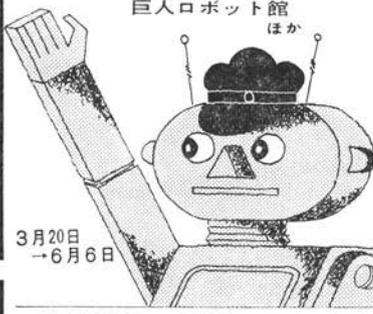
★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

グランド・フェア

ロボット学園

ロボットの幼稚園から大学まで

ロボット島
巨人ロボット館
ほか



3月20日
→6月6日

宝塚ファミリーランド

定価 百八十円 (送料六円)

半年分 千円 (送料共)

一年分 二千六十円 (送料共)

昭和四十六年三月二十五日印刷

昭和四十六年四月一日発行

大阪府南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

発行所 川柳塔社

大阪府南区鰻谷仲之町二〇番地
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

ペンペン草

★本年度の二賞第一回
目の中間発表である。
ことしからは三月号で
発表したが三月がスベ
ースの都合がつかなか
った。本年から選考委
員に大坂形水氏をわす
らわすことになった。
★校正の誤植で選にも
れた句がなかったが、
いつもこのことが気に
なる。『字を小さく
草書にされて』と誤
植したこともあった。
文字は楷書でお願いし
たい。

先生を慕って慶応へは
いられたが、入学した
年に荷風先生は慶応を
やめられたそうであ
る。三田文学へ小島先
生がはじめて活字にさ
れたのは、森鷗外らの
書物から誤字を拾い集
めたものだろうだ。そ
んな縁で森鷗外のある
刊行物の校正を小島先
生に依頼されたとか。
★校正にうるような小島
先生には、右のような
逸話があったわけだ。
あとでこの話を聞いて
背筋に寒いものを感じ
たことである。

▼これまではタツタ
小一時間ほど、變う
つな時が毎月一日だ
けありました。それ
は発送日のタクシ。乗
さがしてした。乗っ
て五分間の郵便局な
の。いつも乗車拒否
にありました。
▼天笑さんが車と共
に手伝いに来てくだ
さるようになってか
らは楽しい送本日に
なりました。
—菓子—

★小島先生には原稿料
がわりに北浜の菊寿堂
から甘いものをお送り
していた。「応雜誌
—漫才—の編集長とい
うことになっていたの
で、秋田実先生から菓
子は一任されていた
が、小島先生は菊寿堂
いがいの菓子は口にさ
れなかったのである。
★かつての名作『新妻
鏡』や『人妻椿』は菊
油寛の要請で書かれた
そうだが、小島先生は
あくまでも純文学の人
だった。若く美しい視
英子夫人の内助で、
『小島源氏』へ執念を燃

★小島先生は永井荷風

★花が呼ぶ四月。
(不二田一三夫)

料理も電話も **551** ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬菜 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストア

★ 健保適用

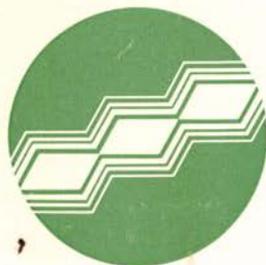
肝機能の保護と改善に！

グルタチオン製剤

グルタイド[®] 注射用

高純度のグルタチオンであるグルタイドがエネルギー代謝、諸酵素賦活、解毒など優れた作用を発揮します。

- 〔臨床応用〕
- 各種肝疾患、術前・後の肝機能障害
 - 妊娠中毒症、自家中毒、小児消化不良症の予防と治療
 - 各種アレルギー性疾患（湿疹、尋麻疹など）
 - 放射線障害の予防
 - 角膜疾患および白内障の予防と治療
 - 糖尿病時の糖代謝の改善



田辺製薬株式会社
大阪市東区道修町3丁目2番地

剤型	包装	健保薬価
100mg	10管、50管、100管(溶解液 2ml 添付)	1管 ¥240.00
200mg	10管、50管 (溶解液 4ml 添付)	1管 ¥470.00

H59 G 2



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影